
トーヨコミューナ ～お嬢ちゃん たわごとなんて 気にすんな～

近藤美潮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トヨコミューナ　　お嬢ちゃん　たわごとなんて　気にすんな

【Nコード】

N1447L

【作者名】

近藤美潮

【あらすじ】

お嬢様短大美容科卒業後、アパレル会社「DIY！　OUT　OFF　BLACK」に事務正社員として就職した主人公高木みうな（22歳・どこもかしこも3Lサイズの女）は、刺激のないOL生活に退屈しきっていた（恋人はパソコン）。友人の麻巳子と出かけた渋谷のカフェバーで呑んでいた時、センター街の奥で個人経営のラウンジェリーショップを営む宇崎洋平（28歳）になぜか見初められ、地味なOL生活から一転華やかなモデルの世界に足を踏み入れることになり……。

vol.1【あたしはコンプレックスの塊 第1話】（前書き）

サクサク読める若い女性の成長物語を書いてみました（ラブ要素あり）。この小説に関しては主人公みうなが心身ともに成長していく過程で、女同士の嫉妬やケンカなどの描写が多少含まれておりますので、R-15指定にさせていただきました。そういった描写が苦手な方は閲覧をお控えください。

vol.1【あたしはコンプレックスの塊 第1話】

あたし、高木みうな。某短大卒の二十二歳。

一応、ギャル向けアパレルブランド「DIY」に勤務してる。でも、販売員じゃなくて、事務。

ご覧の通りあたしは、身長だけデカいのがとりえて、ブスだし、デブだし、メガネだし、いまだに処女ですしね……。

合コン？ もちろんしたことあるよ。でも、結果は聞かないで。

学生時代は、苗字が「高木」だから、ずっと「ブー」って呼ばれていた。

短大を卒業したら「DIY」に入社して、販売員になることが夢だった。

だから、内定したときは大喜びした。

でも、いざ入社して、配属先を決めるとき、上司にはっきり言われたの。

「高木さんのルックスじゃ、販売員はムリね」って。ガッカリだよ。

あたしが卒業した短大はお嬢様学校とされていて、

一応美容科卒なんだけど、どこをどういじっても周りの女の子に笑われるだけ。

だから就職のためにパソコンの授業も取ってた。

おかげさまで、入社三年目にしてやり手の事務員で通ってるけど、それが何？ って感じ。

あゝあ、あたしってばこのまま一生男に縁がないのかなあ……。

vol.1【あたしはコンプレックスの塊 第1話】（後書き）

【主な登場人物紹介】

高木みうな（22歳）ギャル向けアパレル会社「DIY!」総務部勤務のありふれたOL。彼氏いない歴〃年齢

菊池麻巳子（22歳）みうなとはお嬢様短大中等部からのマブ。某エステ勤務。彼氏有。

宇崎洋平（28歳）渋谷センター街奥で個人経営のランジェリーショップをたった一人で切り盛りしている野心家の男。謎多し。

浜井翔（27歳）バンドマン兼お好み焼き屋店主。宇崎とは中学生時代バスケ部の先輩後輩として知り合う。金髪。

榊えみり（32歳）「DIY!」総務部部长。元販売部のカリスマショップ店員。性格はDS。これまた謎多し。独身。

小沢喜代彦（年齢不明）「DIY!」代表取締役。会社の暖簾を守りつつ、若き野心家を育てる能力を持ち合わせたやり手のビジネスマンだが、どこか天然な憎みきれないオヤジ。

vol.2【あたしはコンプレックスの塊 第2話】

こんなあたしにも親友はいる。唯一あたしを「ブー」と呼ばない、同じ短大卒の菊池麻巳子。

あたしたちが通っていた短大は、

中学からのエスカレーター式の私立校だったから、

麻巳子とは中学からの親友ってことになる。

はじめて会った麻巳子は、お世辞にも美人とはいえなかった。

あたしほどじゃないけどま、同じ人種かな？　ってとこ。

「よくいる二人組の女芸人」の太ってる方があたしで、

痩せてる方が麻巳子だと思ってくれればいい。

麻巳子は、あたしと一緒に短大の美容科に入学してから、急に派手になった。

化粧も覚えて、髪形も服装もいつもかわいくして、ネイルもきれいにして……。

合コンは、ほとんど麻巳子からのお誘い。

努力の甲斐あってか、麻巳子はワセダの男を捕まえた。

千葉出身、農家の跡取り息子で、

あんまりイイ男じゃないけど、することはしてるらしい。

麻巳子もやつぱり「DIY」に販売員として入社したかったみたい。でも入社試験に落ちて、今は、聞いたこともないエステの勧誘員になってる。

会ったんびに「ノルマが、ノルマが……」ってボヤいてる。

だけど、痩せても枯れてもエステはエステ。麻巳子はエステに入社してから、

見違えるほどきれいになった。

そんな麻巳子と、昨日も仕事帰りにチェーンの居酒屋でご飯を食べた。

「みうなあ、今、うちのエステキャンペーン中で、この五千円の手ケットを買えば、

三時間たっぷりエステの初期体験できるのよ。どう?」

「なんか、麻巳子のエステって、いつもキャンペーンやってない?」

「いやいやいやいや、今回のキャンペーンは本当にお得だからさあ」。

どう? みうなあ。永久脱毛? お肌つるつる? 足ほっそり?

全部できるのよ。夏に向けてさ、ねっねっねっ!」

「麻巳子オ、あんたエステに入社してから、会ったんびに勧誘の話ばっかするよね。

そりゃあ、あたしみたいな女が絶好の力モだってことはわかるけど

……」

「そんな、長い付き合いのみうなを力モだなんて思ってるわけないじゃん!

絶対お得だからあ。今度の休みにでも、五千円で三時間コース、どう?」

「しょうがねーな」

結局あたしは、麻巳子に寄付をするような気持ちで、その五千円の手ケットを買ってしまった。

vol.3【あたしはコンプレックスの塊 第3話】

土曜日、モトを取るために、自由が丘にある麻巳子のエステに行った。

最初は麻巳子が応対してくれたけど、しばらくしたら

麻巳子よりずっと年上の、巻き髪のやり手っぽい女が出てきた。

案の定、セールスされまくった。

「これこれのサービスを受けるのに、これだけローンを組めば……」
なんて話になってくる。

だいたいねえ、ワキ毛一本永久脱毛するのに千円もするなんて！
全部脱毛したらいったいいくらかかるっていうのさ！ バカバカしい。

あたしには、一つだけ長所がある。

それは「ブー」と呼ばれていじめられていたころ培った、口の悪さだ。

「ですから、高木様、当エステにご入会いただければ……」

「入会？ あたしはこのチケットで三時間エステの体験できるっていうから来たんですよ。あたしだって暇じゃないんですから、早く体験させてください」

「あの、高木様……」

「うっさい！ さっさと体験させろっての！

あたしや、騙されないわよ！

だいたい、ワキ毛一本千円だなんて、ボッタクリよ！」

「さようでございますか、わかりました」

その女、あたしから金取れないってことがわかったと、急に態度が変

わった。

チケツトをひったくって、タオルとガウンよこして、やる気ゼロの低いトーンの声で

「五号室にいらしてください」だってさ。笑っちゃう。

期待してなかったけど、三時間のエステ体験は五千円分の価値しかなかった。

ワキ毛の永久脱毛も左ワキの上のほうだけをちょこん。

フェイシャルも、よくわかんないオイルを顔に乱暴に塗ったくらいで、

十五分くらい蒸しタオルしてはい終わり。最後に美容液をちょこん。瘦身も、エステというよりは、クイックマッサージに来たような感じ。

二の腕をちょん。お腹をちょん。太い足をビシビシバシちょんちょんちょん。

全部終わって時計を見たら、三時間体験のはずなのに、二時間ちよいしか経ってないんでやんの。

あたしは着てきた服に着替えると、さっきの巻き髪的女と麻巳子に言ってやったわよ。「サーギ！」って。

そんな詐欺に近いエステでも、エステはエステってのがよくわかった。

アパートに帰る途中、今までにありえなかったことが起きたのだ。

生まれてはじめてテレクラのティッシュをもらった。

生まれてはじめて美容院のチラシをもらった。

生まれてはじめてＡＶの勧誘をされた。

生まれてはじめてホストクラブのキャッチを受けた。

生まれてはじめて……って、普通の女の子だったら普通に街でされていることに、あたしは今まで全く無縁だった。なんだか、やっと女として認められたみたいで、ちょっと嬉しかった。だからといって、あのエステに通うつもりはさらさらなかったけれど。

vol.4【変化と出会い 第1話】

日曜日はいつものように一日中爆睡して、それでも「笑点」だけは観て、月曜日、いつものように会社に行った。

「おざーっす！」

総務部は、女ばかり。いつもならみんながチラッとあたしの顔を見て「おはよっす」って言うだけなのに、この日は違った。

「みづなちゃん！ どーしたの？ お肌つるつる！」

とは、二年上のさくら先輩。茶目っ気たっぷりの人だが、会社のホームページ制作を一手に引き受けているパソコンのプロであり、才女。

「高木先輩、お化粧品、変えたんですか？」

とは、今年入社したての二十歳の真里。

パソコンは全くできないが、電話応対と書類作成のプロである。

「へへえ、高木さんも、やっと女に目覚めたのねえ」

とは、販売部から総務部に人事異動してきた

（「DIY」では、販売員は二十五歳を過ぎても結婚退職しないと、自動的に総務部に回される。それがイヤでみんな二十五で辞めてい

く)

三十三歳のお局様、榊えみり部長。

あたしは、総務部の女全員に囲まれて、褒めちぎられた。

「あ、土曜日に、友達がやってるエステの三時間体験受けて。あんまり、有名じゃないエステなんだけど……」

「え、どこのエステですか？ 紹介してくださいよ」

「てゆーか、あたしそんなに変わった？」

「変わった変わった！ なんか急に『女になった』って感じ！」

「『女になった』な、なんか、やらしい言い方だねえ」

「どこのエステ？ あたしにも紹介して！」

「あたしにも！」

「あたしにもお！」

（あゝあ麻巳子は、こうやってイモヅル式にノルマを達成してるわけだ。いい商売よね）

こうして、あたしは総務部の女十二人全員を、

麻巳子経由でエステに紹介することになってしまった。

vol.5【変化と出会い 第2話】

「み・う・な・ありがと〜〜〜！」

あんたのおかげで入社三年目にして
やっと主任に昇格できたわ〜カンパ〜イ！」

週末、あたしは麻巳子に、今までに入ったこともないような、
渋谷のこ洒落たカフェバーに連れて行ってもらった。
もちろん、今日は全部麻巳子のおごりである。

「まったく、いつもはチェーンの居酒屋でワリカンなのに、こういう
時ばっかし」

「ちがうのちがうの！ 本当にみうなには感謝してるの！
十二人も連れて来てくれるなんて！
そのうち八人が入会して帰ったのよ！」

「八人も！ 二人とか三人とか、そんなもんじゃないの？ 本当は

……」

「いや、本当に八人入会してくれたんだって」

「あんなんで？ まあ十二人も連れて行っただから、
集団意識っていうのはあるかもね」

「ちよ、そういうこと言わないでよ。

でもさあみうな、あの体験エステ、けっこう持続力あるでしょ？
お風呂に入ったときとか、いつもと違うなって思ったりしない？」

またはじまった……。ワザと言ってやった。

「そつえばあ、お風呂から上がった後もすぐに
顔がつっぱらなくなっかしい、

化粧のノリもなんとなく良くなったようなあ〜」

「そうでしょ、そうでしょ！　ねえねえねえ、この際みうなもさー」

「キミ達？」

「はあ？」

麻巳子の営業トークを延々と聞かされていたその時、二人組の男があたしたちに声をかけてきた。

いかにも「渋谷を拠点にしてまゝす」というチャラ男だ。

（こ、これってもしかして、ナンパ？）

「キミ達、名前なんていうのぉ」

髪を金色に染めてワックスでセットしているような男があたし達に話しかけてきた。

「麻巳子です！」

「みうなです……」

「いくつう？」

「二人とも二十二歳」

「学生さん？　OLさん？」

「一応、二人とも働いてる。あたしはエステで、みうなは『DIY』って会社に……」

そこまで言うと、金髪の男と一緒にいた、黒髪のチャラ男が急に目を光らせた。その男は、強引にあたしの隣に座った。

「キミ『DIY』で働いてるの？　すごいじゃん」

「いや、販売員じゃなくて、事務ですけどね」

「俺も実は、アパレル関係なんだ。ただし、ちょっとあこぎな仕事
なんだけど」

「あこぎ？」

「そう、こいつ、パンツ屋の店長なんだぜ！」

「ぱ、ぱんつう？」

「黙ってろ、翔。ああ、僕、こういう者です」

男があたしに名刺を差し出した。

「『オリジナルランジェリーショップ・レパブリカ』代表、宇崎洋
平」

とあり、店の住所と電話番号が書かれている。

名刺は白地に黒。縦位置縦書きの、ビジネスマンが持つようないた
ってノーマルなものだった。

「パンツ屋の店長」と聞いて、ピンクとか紫とか、
スケルトンといったがんびりすぎの名刺を予想していたが、
そのシンプルさにかえてセンスの良さが感じられる。それに、こ
ういう名刺をもらうと、

（この人は、ものすごく偉い人）

だと勝手に思ってしまう。あたしもあわてて、
財布の中に一枚だけ入ってたヨレた名刺を差し出した。

「高木みうなさんか、素敵な名前だね」

「あ、あははは……名前ぐらいしか、素敵なとこなくてごめんなさ
い」

「そんなことないよ。みうなさんには、
またお会いすることになるかもしれないな。」

僕、生地の仕事からデザインから店の切り盛りから、

全部一人でやっているんで。

今日は、素敵な二人に出会えたからこれをプレゼントします」

宇崎は鞆の中から二枚のパンティを取り出した。
一枚は赤・黄・緑のレゲエ調の派手なTバック。
もう一枚はベージュのノーマルなものだった。

「きゃー！ これあたし好みー！」

麻巳子は迷わずTバックをひったくった。

あたしはベージュのパンティを手につった。

それはよく見ると、普通のパンティではなく、サニタリーショーツだった。

かなり機能的なデザインである。

「へー、これサニタリーショーツじゃないですか。

すぐ使いやすそう。ありがとうございます」

「ああ、それはまだ試作品なんですけどね。気に入っていただいて光栄です」

「ところで、キミはなにやってる人なの？」

麻巳子が金髪男にツツコミを入れた。

「俺はバンドでギターやってて、普段はお好み焼き屋の店長だけど

……」

「あははははは！ お好み焼き！ しよっぺー！」

「そんな麻巳子、笑わなくなっただっていいじゃない。

あたし、お好み焼き大好きよ。あなた名前は？」

「俺、浜井翔って言います。宇崎とは同中の先輩で付き合い長くて、よろしく」

こうしてあたし達は、宇崎と浜井の四人で楽しい夜を過ごした。
浜井は麻巳子を、宇崎はあたしを気に入ったようだった。
それから四人でドーゲンに……ということはもちろんなく、
宇崎と浜井は終電が出る頃を見計らってあたし達を渋谷駅まで送っ
てくれた。

生まれてはじめてのナンパ、しかも相手は結構イイ男で、
パンツ屋の店長……。電車に乗っている間も、
あたしはずっとクラクラしていたが、
麻巳子は腕組みをしながら納得のいかないようなふくれっ面をして、
ずっと、

「逆じゃね？」

と、ブツクサ呟いていた。

vol. 6【変化と出会い 第3話】

月曜日、

会社に行くと、総務部女十二人全員の肌がツルツルになっていた。三十三歳のお局様えみり部長も例外ではない。

含み笑いをしていると、あたし宛に電話がかかってきた。

「高木さん『レパブリカ』の宇崎さんって方から。一番です」

（う、宇崎さん……なんだろう？ デートだったりして）

「みづなさん？」

「ああ、宇崎さん、こないだはどうもでした」

「みづなさん、今日仕事終わったら時間あります？」

「ああ、はい。うちの会社は残業もないので……」

「仕事終わったら渋谷まで出てくれます？ ウチの店に見学に来てほしくて」

「見学……ですか」

「ヤダ？」

「ああああ、もちろんかまいませんよ」

「ありがとうございます」

ガチャ。

（見学？ なんのつもりなんだろう……）

その日仕事を終わると、宇崎の名詞の裏に書いてある地図を頼りに「レパブリカ」に出向いた。

「レパブリカ」はセンター街の奥の、そのまた奥にある、外国人が経営しているような怪しいアパレルショップが立ち並ぶ通りの一角にあった。こんなところ普段は来ない。

あたしは外国人と目が合うたびに一生懸命目を伏せていた。そしてようやく「レパブリカ」に着いた。

「こ、こんばんわあ」

「ああ、みうなさん。来てくれたんですね」

さすがに月曜日の夜なので、店内には客の姿はなかった。あたしは店内をグルリと見回した。

「DIY 渋谷09店」の半分くらいだろうか。

売り場面積がかなり狭い。しかし、売り物が場所をとらないパンツだけあって、品揃えは充実していた。

男物六割、女物四割といったところ。

内装は女一人でも入れるような感じで

「雑貨屋に下着も置いてある」といった雰囲気。

肝心の商品のパンツはどれも原色で、いかにも若い子向けの「勝負下着」っぽい。デザインもかなり凝っている。

「どうです？ みうなさん、感想は」

「この界限にある店にしては、あんまりおどろおどろしくなくて、女一人でも気軽に入れるってここですかね」

「でもねえ、やっぱりこの辺の店には、女の子は一人では来ないねえ」

「そうですね？ 普通のランジェリーショップよりも

デザインが個性的だし、

このお店じゃないと買えないっていうものが多いですよね」

「そこがウリなんだけどね。なかなか理解してくれる

お客さんがいなくて、毎月カツカツなんだ」

「宇崎さん、この前、仕入れからデザインから経営から、

一人でやってるって言ってましたよね？

これだけの商品を一人で全部つくって経営も、っていうと大変でしょう？」

「もちろんね。開店からレジ締めまでやってくれる売り子が

一人いると楽なんだけど。給料も出せない状態でさ。

あと、本当は表通りに出店したかったんだけど、

家賃払えないからこういうところしか借りられないし。

寝る時間なんて四時間もあればいい方」

「大変なんですね……このお店だったら、

翔君とかが売り子やれば絶対ハマるのに」

「ああ、あいつならハマるよね。あ、話し変わるけど、

今日はみうなさんに相談があって呼んだんだ」

「ハア」

「実は『DIY』と提携して、女性用の下着を置かせてもらえないかな？　と思ってるね」

「うーん、そうだったんですか……」

あたしはデイスプレーに飾ってある、水色を下地にして、アップリケのように小さな赤いハートマークがたくさん縫い付けてあるブラジャーとパンティの上下を見ながら考えた。

かわいい。たしかにギャル向けではある。

しかし「DIY！　OUT OF BLACK」という名のとおり、ウチのブランドは黒とモノトーンを主体とした洋服ばかりだ。

こんな派手な原色の下着を置くには少々ミスマッチである。
あたしはそのことを素直に宇崎に伝えた。

「ウチのブランドは、名前のとおり黒がコンセプトだから、
こういう『勝負!』って感じの原色の下着は
ちよつと難しいんじゃないかな……」

「でもさあ『DIY』を着るような女の子ってのは、
外見がシックでも、下着は派手にしたいものなんじゃない?」
「あー」

宇崎の言うことも、もつともだと思った。

たしかにアウターに黒を着れば、インナーに何色の下着を
付けようがひびかない。普通の下着だけではなく、

ちゃんと「見せパン」「見せブラジャー」という感じの商品もある。
今まで、そういうことに全く縁のないあたしは、
そんな単純なことにも気が付かなかった。

ただ、理屈では正しくても、黒い洋服ばかり置いてある店に
原色の下着を置くのは、
吉と出るか、凶と出るか、とにかくどう転ぶかがわからない。

「吉と出るか、凶と出るか、か……わかった。みうなさん、ありが
とう。」

今日のみうなさんの意見を参考にさせてもらって、
後日『DIY』に企画書をFAXしますよ。

プレゼンのときは、みうなさんにも同席してもらうかもしれないな
「ああ、わかりました」

なーんだ。結局うちの会社をバネにして、
自分のとこの商品を有名にしたいからあたしを呼んだのね、

と思ったが、それは心の中にしまっておいた。

vol.7【変化と出会い 第4話】

夜八時が過ぎていた。宇崎は店を閉めると「お礼に」と言ってお酒とごはんをおごってくれた。

宇崎はいろいろな話をしてくれた。美大でデザインを専攻していた宇崎は、

もともと、下着メーカーのデザイナーとして働いていたが、二十五のときに独立し「レパブリカ」を立ち上げたそうだった。

宇崎は現在、二十八歳。三十になるまでには

「レパブリカ」を有名ブランドにしたい、ということを楽しみに語っていた。

あたしはそんな宇崎の話やタバコを持つ手の独特なしぐさ、夢を語るときの少年のような表情に、好感を覚えていた。

どうせ「DIY」に勤めていなかったら、

宇崎はあたしなんか相手にしなかっただろう。

それでもあたしは、イイ男を目の前にしてすっかり舞い上がっていた。

「毎日大変で、毎月カツカツだけど、

やっぱり自分の好きなことをしてメシが食えるってのは

最高に幸せなことだね。もちろん今のままで満足してるわけじゃない。

僕は『レパブリカ』をもっともっと大きくしたい。それだけなんだ」

宇崎の力強い言葉を、あたしは素直に羨ましいと思った。

vol. 8 【変化と出会い 第5話】

別れ際、宇崎が奇妙なことを言い出した。

あたしの写真を撮りたいという。

てつきり、携帯のカメラで撮影するのだろうと、

あたしは適当にポーズをとったが、

宇崎は鞆から大きめのデジカメを出し、

一流カメラマンのようにいろいろな指示を出してきた。

「うん、うん、そんな感じ。イイねえ。

今度は両腕を組んで頭の後ろに回して、

胸を突き出してニッコリ微笑んでみて……」

道行く通行人が

「プツ」「なに？ あのデブス」

「マニア雑誌の撮影？」「女芸人のグラビアじゃない？」

などと言いながら含み笑いをしているのがわかる。

顔から火だけでなく、屁も出そうなほど恥ずかしかったが、

あたしは黙って宇崎の写真撮影に付き合った。

「はい。これで終わり。みうなさんありがとう」

「宇崎さん、その写真なにに使うんですか？」

「インターネットのヌード画像と首をすげ替えてアイコンに」

「ななっ……」

「ウソですよ。悪い目的では使いませんから。まあ、楽しみにして

てください」

宇崎はその日もあたしを駅まで送ってくれた。
帰りの電車の中で、頭の中にずっと「？」マークが点滅していた。

vol.9【キツすぎる靴 第1話】

言い忘れたけど「DIY」は、販売部と総務部だけで成り立っているわけではもちろんない。

店舗を一つでも増やすために、朝も夜も走り回ってる営業部はもちろん、

一流ファッションモデルに囲まれて、毎日ウハウハしながら雑誌のグラビアやポスター撮影をやってる男だらけの宣伝部もあるし、

ウチはセレクトショップじゃないから、店頭に置く商品を作する、服飾関係の専門学校や大学を卒業した、プロのデザイナーさんやパタンナーさんがちゃんという、商品制作部、商品開発部だってある。

さらにこのご時世、いわゆる「ハケン」は一人も使っていない。給料こそ安い、会社の末端の事務員も販売員も全員「正社員」である。

こうやって言うと、なんだか六本木ヒルズにある会社だと思ってしまう？

でもウチの会社は中目黒という、ちょっと渋い場所にある。

わざわざ家賃の高い六本木にオフィスを構えるよりも経費の削減になるし、中目黒という場所柄、

商品の搬入なども六本木よりスムーズなんだそうだ。

オフィスの一階はショップで、

二階は主に社員の打ち合わせ目的だが、

一般にも開放されているカフェとして営業している。

ちなみにあたしは、通ってた短大が横浜にあったから、短大進学と同時に東京の下町にあった実家を出て、日吉にある安いアパートに四年間ずっと住みついでる。だから通勤も東急東横線一本で超楽チン……って、言いたいことはそんなじゃない。

なぜかあたしは、普段は五階の社員食堂でしか会わないような、営業部、宣伝部、商品制作部、商品開発部、一階のショップの店長。そして総務部のお局様えみり部長と、取締役、最後にはもちろん社長という、そうそうたるメンバーが揃う会議に出席することになってしまった。

そう。宇崎が正式に「DIY」とアポを取り、来週の金曜日にプレゼンにやってくるというのである。

Vol.10【キツすぎる靴 第2話】

宇崎は最初「DIY」総務部に企画書をFAXで送ったそうだが、しかし、こういった営業目的の企画書は、毎日山のように届くので、あたしは宇崎のFAXに気づかなかった。その企画書を総務部の誰かがコピーして、他の企画書とともに、いつものように各部署の担当者に回した。

内部の反応はすこぶる良かったらしい。

まず「レパブリカ」の商品を紹介しているホームページを見た、商品制作部のデザイナーさん達が、ページに掲載されている商品を気に入り、商品制作部で「レパブリカ」のことが話題になったという。

その後、その噂を聞いた宣伝部の人間も気に入り、営業部の人間も気に入り……と、話はトントン拍子に進み、宇崎はまんまとプレゼンにまでこぎつけたというわけだ。

あたしはそのことを、従業員全員に回ってくる回覧板ではじめて知った。

プレゼンに出席する各部署の社員名簿の一番下に、

「総務部 高木 みうな」

と書いてあったのを見たあたしは目が点になり、即座にえみり部長のデスクに駆け寄った。

「えみり部長、あたしもこのプレゼンに出席するんですか？」

「そうみたいねえ。なぜなんでしょうねえ？　きつと、毎日ずっとパソコンにかじり付いて、お尻が重くなってるから、たまにはプレゼンにでも出ておいでよ、って意味じゃない？」

「そんな、まさかあ」

「冗談よ。高木さん、あなたこの『レパブリカ』の宇崎さんって方とお知り合いなんですってね」

「え、どうしてそれを？」

「企画書の中になぜか

『総務部の高木様を、ぜひプレゼンに参加させてください』
って書いてあったのよ。あんたもよくやったわね。

あんなイイ男とどこで知り合ったのよ？」

「いやあ、それはちよつと……あのう」

「いいわよ。わざわざ言わなくても。

とにかく、宇崎氏はあなたのことを相当見込んでるらしいの。

わかったわね？　必ず出席するのよ」

「は、はい……」

学生時代に、気の強いいじめられっことして身に付けた口の悪さが、本格的に役立つときがやってきたと思った。

あたしははりきってプレゼンの日を指折り数えていた。

しかし、宇崎に見込まれたのは、口の悪さではないらしい。

あたしがなぜか「シンデレラの靴」を両方ムリヤリ

履かされる立場に置かれるとは、このとき誰が予想していたであろ
うか。

vol.11【キツすぎる靴 第3話】

プレゼンの日がやってきた。

入社三年目にして、あたしはじめてオフィスビルの最上階にある
大会議室に足を踏み入れた。

入社してからずっと、入ることを固く禁じられていた場所。

開放感のある大きな窓、こげ茶色の長い机が

カタカナのコの字型に並べられていて、

部屋の真ん中にはプロジェクターが置いてあり、

その先にはそれを映し出すスクリーン、ホワイトボードなどがある。

会議室の中には、まだ誰もいない。

勝手に進もうとすると、受付にいた女に止められた。

「部署と、お名前をお願いいたします」

「そ、総務部の高木みうなです……」

受付の女は、A4サイズの書類をパラパラとめくり

「総務部 高木みうな」の欄に。印をつけると、

黙ってあたしの名前が書いてあるプラスチックの名札を差し出した。

「プレゼン中は、ずっとその名札を左胸につけて、

終了後は速やかにこちらへお戻しく下さい」

あたしは言われたとおりにすると、自分の席を探した。

全ての席にはすでに書類が置かれており、

机の手前には名前が書いてある。

どうせあたしの席なんて下座だろうと、受付から近いところをウロチョロしたが、なかなか見つからない。

「あー、高木さん？」

あたしの様子に見かねたのか、受付の女が半笑いで声をかけてきた。

「高木さんの席は、こちらです」

後についていくと、なんとその女は、スクリーンに最も近い窓側の席にあたしを連れて行くではないか。こんな上座の席なんて、社長が取締役が座るとこだね……と思うたが、

そこにはしつかり「総務部 高木みうな」と書かれていた。

心臓がバクバクしたが、できるだけ平静を装ってその席に座った。左側は司会者のブースになっていて、右隣の席にはしつかり社長の名前が書いてある。

（な、なにが起こるっての？）

プレゼンの時間が近づくにつれて、どんどん人が集まってくる。社長もやってきて、無言であたしの隣に腰を下ろす。

極度の緊張を隠すために、あたしは目の前にある書類を見ようとした。

すると右から声が聞こえた。

「君イ、プレゼンが始まるまでは、書類には目を通してはいけないんだよ。それくらい常識だろう」

声の主は、もちろん社長だ。

「あ、はい、すみませんでした」

あたしは真っ赤になって書類を元に戻した。

ふと前を見ると、目の前にえみり部長が座っているのに気づいた。
えみり部長は、あたしと目が合うと

「なにもかも知ってるわよ」といった表情で、ニヤリと笑った。

vol.12【キツすぎる靴 第4話】

間もなく、司会者が宇崎と共に入ってきた。相変わらず、渋谷をほつき歩いているチャラ男のような格好をしている。

宇崎は入り口近くにある椅子に座った。

プレゼンが始まった。司会者が宇崎を紹介する。

「それでは『オリジナルランジェリーショップ・レパブリカ』代表、宇崎洋平様、正面にお越しく下さい」

宇崎は堂々とした態度でスクリーンの前に立った。

「ただいまご紹介にあずかりました

『オリジナルランジェリーショップ・レパブリカ』

代表の宇崎洋平と申します。本日は社員の方々に、

わたくしのために貴重なお時間を割いていただけたことを

大変感謝しております。それでは、資料の1ページ目をご覧ください
い」

そこには

「DIY feat. Republica」

とシンプルに書かれていた。ふん「レパブリカ」って

こういうスペルだったんだ……。と思いながら、

あたしはわけのわからない話をボケーっと聞いていた。

そんなあたしをよそに、プレゼンは続く。

「それでは只今より『DIY feat・Re publica』のメインキャラクターというべき専属モデルの発表をいたします。皆様、手元の書類をご覧いただく前に、こちらをご覧ください」

ザーーーーー。

電子音とともに、背後の窓の黒いカーテンが動き出し、宇崎がプロジェクターの方に移動した。

照明も全部消え、大会議室が真っ暗になる。

やがてプロジェクターに明かりが灯り、スクリーンに画像が映し出された。

「ギャハハハハハハハハハハ！」

次の瞬間、会議室は笑いのるつぼと化し、あたしは固まった。なんとそこには「レパブリカ」の下着だけを身に着けたあたしのセミヌード写真が映し出されていたのである。

おそらく、宇崎がパソコンを使ってデジカメで撮ったあたしをうまく脱がせて「レパブリカ」の下着と組み合わせたのだろう。

どうやったらこんなにうまくできるんだ、というくらい精巧にできた写真。アイコラよりタチが悪い。

あたしは、恥ずかしいのも忘れてその場に立ち上がり、宇崎に牙を剥いた。

「宇崎さん、どういう冗談ですか？
まさかあたしがモデルになるってわけでもあるまいし！」

「あなたがモデルになるんですけど」
「は？」

宇崎が言葉を続けた。

「総務部の高木みうなさん。彼女を
『DIY feat. Republica』の専属モデルにします
！」
「えええっ！」

とたんに、プレゼンに参加している社員達がニョキニョキ立ち上がった。

「どういつつもりだ！」
「目が腐る！」
「ウチのブランドのイメージが落ちる！」
「そんなものを公の場に出したら会社に抗議が殺到するぞ！」
「そーだ、そーだー！」
「やめろ、やめろー！」

あたしのルックスがおもいつきりけなされていたが、
屈辱よりも、社員達の言うことのほうがもつともだという
気持ちの方が大きかった。

こんなものが公の場に出されたら、自分の写真とはいえ目が腐るし、
自分で自分の会社に抗議したいくらいだ。
だが、宇崎は落ち着いて言葉を返した。

「最初のうちは抗議も来るでしょう。
お客様も皆様のようには大笑いするでしょう。」

しかし、わたくしは、彼女をずっとこのままの姿で
専属モデルに起用しようとは思もちろん考えておりません」

「どういう意味だ!」

「彼女をどんどん美しくするのです。たとえばこんなふうに」

宇崎は大量の合成写真を、一定のリズムでスクリーンに映し出した。
あれれれ、あたしがだんだん痩せていく……

髪がどんどん長くなっていった、顔も徐々にだけど綺麗になってゆく……。

最後の写真が映し出された。黒髪ロングストレート、
真っ白な肌、赤い唇をした小さな顔、
それに続く細い腕と豊満なバストと、
キュツと締まったウエスト、小さなヒップに細く長い足……。
ありや、あたしがモデルになっちゃったよ。

「このように、彼女のような女性が
どんどん綺麗になっていく様を

お客様に見ていただくのです」

「それはもちろん、そうやってCGを使うんだろう?」

「いいえ、高木さん本人を綺麗にするのです。」

最終的には彼女を実際にこういうルックスにします」

「どうやってやるんだ!」

「美肌・痩身については、只今エステティックサロン

『GET CUTE』と交渉中です」

(「GET CUTE」って、麻巳子が働いてるエステじゃん……)

「顔はどうするんだ! 痩せたからってそこまで綺麗になるわけがない!」

「彼女の承諾を得た上で、整形手術を受けていただきます」

（だっ、誰が承諾なんかするもんですか、おっかない！）

「エステだの、整形だの……費用はどこから捻出するんだ！」

「彼女にはこのプロジェクトの広告塔となつていただきますので、交渉しだいで費用は一切かからないと思われます。

しかし万が一の場合『レパブリカ』と

『DIY』で折半することを考えており……」

Vol.1・13【キツすぎる靴 第5話】

「ふざけるな！」

ついに、あたしの右隣にいた社長が宇崎に牙を向いた。
これにはさすがの宇崎も言葉を返せなかった。

「……」

静まり返る会議室。全員無言で、綺麗になったあたしの
セミナー写真と社長を見比べている。

「いーじゃん！」

「いーじゃんねえ？」

「カワイイじゃんねえ！」

「最初の写真もインパクトあるしねえ！」

「そーそー『ブスカワ・デブカワ』って感じ！」

「あんな子が実際にだんだん綺麗になるんでしょ？ 面白いよ！」

「そーそー、面白い面白い！」

「絶対ウケる！ いろんな意味で！」

（え……）

大会議室の下座の方から、キャピキャピとした黄色い声が飛び交った。

商品制作部、商品開発部、オフィスビルの一階にある
ショップ店長などの、若い女性社員達が大騒ぎしている。

「小澤社長。現場で働く若い女性スタッフには、

このプロジェクトが好意的に

受け入れられているようですが、どうお考えでしょうか？」

「うーん、最近の若い女性というのは、悪趣味だねえ」

「社長！」

突然、目の前のえみり部長が立ち上がった。

「悪趣味とはどういうことですか？」

わたくしも、一人の女として、このプロジェクトは

たいへん興味深いですし、女には誰しも、

こういった『変身願望』があるのではないのでしょうか？」

自分のルックスに自信のない若い女性に、

光を与えるすばらしいプロジェクトだと

わたくしは考えますが、いかがでしょう社長」

えみり部長の目は真剣だった。

「君が、そう言うのなら……まあ、いくつか問題点はあるものの、実行するのを考えてみてもいいプロジェクトだとは思っがね」

オーーーーーッ！

会議室に歓声が起こった。全員、宇崎のプロジェクトを好意的に受け入れたようだった。

「静粛に！」

しかし、その歓声は、社長の鶴の一声で一瞬にしてかき消された。

「宇崎さん、一つ聞きたいことがある」

「はい」

「万が一高木君が、このイメージどおりに綺麗にならなかったら、どう責任を取るつもりかね？」

「はい。すぐに『DIY』から撤退し、

もし会社で損失が発生した場合は、

わたくしがその全ての責任を取る覚悟でございます。

もちろん『レパブリカ』も、社員はわたくし一人ですが解散し、その全てを『DIY』の損失補填に充てる所存です」

（宇崎さん、本気なんだ……）

「ふむ。わかりました。このプレゼンの後、早急に社内会議をし、宇崎さんに結果をご報告いたしましょう」

「ありがとうございます」

こうしてプレゼンが終わった。

Vol.14【祝福と揺らぐ想いと 第1話】

会議室を出ると、あたしはすぐに宇崎の後を追いかけた。

「宇崎さん！ ちょっとお話したいことが……」

「ごめんなさい。今日はあなたと二人きりで

お話しするお時間はいただいてないのでね。また後日、改めて」

宇崎はビジネスライクにそう言うと、

背を向けてエレベーターホールに歩いていった。

あたしはさらに宇崎を追いかけようとしたが、
後ろから肩をポンポンと叩かれた。

振り向くと、受付の女が立っていた。

「名札、返してください」

Vol.15【祝福と揺らぐ想いと 第2話】

（あたしがモデル？ そんなバカな）

エレベーターに乗って、総務部に戻った。

みんな黙々と仕事をしている。

プレゼンの結果は、まだ末端の社員には知られていないらしい。
あたしは自分の席に戻り、いつものように淡々とパソコンのキーを打った。

小一時間ほど経っただろうか？ えみり部長の内線電話が鳴った。

「ああ、はい。社内会議の結果が出た……まあっ！
わかりました。すぐに本人に伝えます」

ガチャ。

「高木さん！ あなた正式に『DIY feat・Republ
ica』の
専属モデルに決まったわよっ！」

（え、えみり部長、そんなに大きな声で言わなくても）

「え！ みつなちゃんが、モデル？」

「えええええええええっ！」

さくら先輩の声を皮切りに、あたしは再び総務部の女全員に囲まれた。

「高木さんよくわかんないけど、よかったね！」

「ワケわかんないけど、モデルおめでとう！」

「えー、高木先輩がモデルになるってどういことですか？」

「こういうことよ」

えみり部長がプレゼンの資料をみんなに見せた。

最初の写真と、最後の写真だ。

改めて見ると、「使用前↓使用後」の広告にしか見えない。

「え！ 高木先輩が、実際にこういうルックスになるんですか？」

「そうよ。無料でエステに通って、高木さんを

実際にこういうルックスにするの。

ちなみに契約するエステは、あんた達も通ってる『GET CUT

E』よ」

「えみり部長、エステだけなんですか？ 整形は？」

「セーケー……」

とたんに全員が退いた。

えみり部長がクスクス含み笑いをしながら言葉を続ける。

「さすがに整形は、やりすぎだろうって。

失敗する可能性もあるし、なにより女っていうのは、
痩せれば顔つきが変わるものですからね。

顔つきが変われば、あとはメイクでどうにでもなるでしょ？

だから整形はナシになったの。美肌と、痩身だけ。

わかりやすく言えば、最近痩せた女芸人が、

どどん雑誌のグラビアモデルになってるじゃない？

あれと似たようなものだと思ってくれれば、イメージしやすいかも
ね」

「そうだよね、可愛くなった女芸人っていっぱいいるもんね。
整形なんかなくても」

「そう。その辺を宇崎氏にうまく話したら、納得したそうよ」

「へえ〜」

「どうみんな、今日は高木さん主役で、

仕事が終わったらみんなで呑みに行かない？

金曜日のこの時間からだ、カフェバーを予約するのは無理だから、
チェーンの居酒屋とかでもいいかしら？

会費二千円で。足りない分はあたしが出すわ」

「もちろん行きま〜す！」

その日、会社の近くにあるチェーンの居酒屋で、
あたしは総務部の女社員十二人全員に祝福されながら、
安い酒を浴びるほど飲んだ。

「高木さん、あなたはモデルになるんだから、
こうやってバカみたいにお酒を飲んだり物を食べるのは、
これで最後にしなさいねー！」

えみり部長が顔を真っ赤にしながら大声で言った。

「はい！ えみり部長！」

と言いつつ、あたしはレモンサワーをがぶ飲みし、
大きなメキシカンピザをほとんど一人でたいらげた。

vol.17【ずっとそのまま 第1話】

ピーポピーポピポピポポポ♪

土曜日、あたしは麻巳子からの電話で叩き起こされた。

「みうなっ！ 聞いたわよあんたウチのエステモデルエステモデル
」！

「ちょ、大声で話さないでよ。あたし今、二日酔い……」

「あゝ、ごめんごめん。後でメールする」

ピッ。

あたしは普段電源を入れっぱなしにしている
携帯の電源を切って再び爆睡した。

目が覚める。ボーっとしたまま携帯の電源を入れ、
メールチェック、麻巳子からメールが一通届いていた。

件名： 麻巳子

本文：みうなあゝ。デルモ決定おめでとー！

デルモは食事制限もしないといけないから、

あんたの大好きなお好み焼きおごってあげる♪

言っとくけど、脂っこいものを食べるのはこれで最後にするのよあ
ゝ。

明日、渋谷の翔君のお好み焼き屋いこ。

翔君のお店のお好み焼き、スッゴイ美味しいんだよ。

（なんで麻巳子、翔君のお店に行ったことあるんだろ？
はじめて会った時はあんなにバカにしてたのに）

すぐに麻巳子にメールを返した。

件名：みうなっす。

本文：いつの間に翔君のお店に行ったの？

あたしに内緒で。てゅーか、ワセダの男はどうした？

すぐに返事が帰ってきた。

件名：Re：みうなっす。

本文：あゝ、あいつダメダメ。別れた。今は翔君と付き合ってます♪

（あ、ああん？）

すぐメールを返した。

件名：Re： Re：みうなっす。

本文：もしかして、もうやっちゃったんかい？

すぐ返事が帰ってきた。

件名：Re：Re：Re：Re：みうなっす。

本文：はーい！ やっちゃいました♪

ていうか、さっきまで翔君、あたしの隣で寝てました
もう、仕事行っちゃったけど……。

（こ、このお……）

件名：Re：Re：Re：Re：Re：みうなっす。

本文：このプレイガールちゃんがあ！（怒）

返事が来た。

件名：Re：Re：Re：Re：Re：Re：みうなっす。

本文：別にいいじゃん。男も女もルックス。

それに翔君ってすごい子なんだよ。

あの、インテリぶったワセダのイモ野郎とは大違い！

みうなだって、デルモになれば、いろんな男とやりまくれるよ。

宇崎さんともねっ（ワラ）とにかくお好み焼き食べにいこ！

日曜日、モヤイ像の前で、六時だよ、全員集合！ グッピョー！

（ったく！）

あたしはそれ以上麻巳子にメールする気にならなかった。

たしかにモデルになれば、処女とも才サラバできるかもしれない。

でも、あの宇崎さんがあたしとセックスしてくれるわけないでしょ。

（ごめんなさい。今日は【あたしと】二人きりで
お話しするお時間はいただいてないのでね。また後日、改めて）

宇崎の声のトーンは低かった。あのビジネスライクな口調。
表情だって覚えてる。あの人にとって、チャラ男の格好は鎧でしか
ない。

中身は、一流のビジネスマン。
商品でもあるあたしに手を出すわけなんかない。

その時、心がブワツと熱くなるのを感じた。
やばい……。

あたしは宇崎に完全に惚れている。

「そりゃ、好きにもなるよ……」

つい唇から独り言が漏れてしまった。

vol.18【ずっとそのまま 第2話】

それでも、お好み焼きに目が無いあたしは、日曜日六時に渋谷のモヤイ像に行った。

もちろん目的はそれだけではない。

翔君に誘導尋問して、少しでも宇崎の情報を引き出そうという魂胆があった。

「みうなあゝ！」

モヤイに着くと、麻巳子が先に来て待っていた。

「麻巳子、なんでハチ公じゃなくてモヤイなの？」

「こっちの方が翔君のお店に近いの。さっ、行こ」

あたしは麻巳子の後についていった。お好み焼き屋というと、たぶん誰もが真っ先に、自分達で焼くスタイルの、わりと広めの店を想像する。

しかし、麻巳子は、飲食店などなさそうな、

渋谷の裏の裏と言うべき、エロ雑誌や、エロDVDが置いてあるような店が立ち並び怪しい通りを、恥ずかしげもなくどんどん進んでゆく。

「麻巳子……翔君のお店って本当にこんな場所にあるの？」

「まあ、ついてきてよ」

店の中にいるのも通行人も、眼鏡をかけたオタクっぽい男だらけ。こんな場所を女二人で歩いているという、

男達の好奇の視線が気になったが、
麻巳子はお構い無しに通りをズンズン突き進む。

やがて、お好み焼きの香ばしい匂いが漂ってきた。

「みうな、ここよ」

「……。」

言葉を失った。一応、看板に「お好み焼き 狸々」

と書かれているが、なんだか、新宿ゴールデン街にありそうな

一杯飲み屋という感じ。店の外にはなぜか赤提灯が吊られている。

匂いこそなければ、お好み焼き屋というよりは、

ヨッパライオヤジ御用達の店というイメージだ。

「まあ、入りなよ」

中に入ると、翔君が出迎えてくれた。

「オッス、麻巳子。みうなちゃんも久しぶり」

店内には、翔君一人しかいなかった。

はじめて会ったときとは大違い。

いかにも「お好み焼き屋」と言うべき、

薄汚れた白衣に身を包んでいる。

やはり飲食店の店長が、金髪だとトラブルが多いのだろう。

頭に乗せた帽子に刺された何本ものヘアピンで、

金色の髪を必死に隠しているのがわかる。

席はカウンターしかなく、イスも六席しかない。

どうやら自分達で焼くスタイルではなく、
翔君が目の前の鉄板で焼く仕組みのようだ。
当然のごとく、あたし達以外に、客の姿はない。

「はっはっは、ビックリしたでしょみうなちゃん。

『グルメ雑誌』じゃ絶対紹介してくれない店

『お好み焼き しょうじょう』です」

「翔君。こんなんで採算取れてるの？」

「へっへっへ。少なくとも宇崎の店よりは。

やっぱり、なんだかんだ言って小銭が一番儲かるんだよね。

商いの基本だよ。これでも、渋谷うろついている奴らの間では、
隠れた名店として通ってる」

「そう。週末は結構混むのよね。さっきのオタク男とか

『これからドーゲン行くぜ！』って感じの若いカップルで。

あたしも最初来たときは退いたけど、

店の外に行列ができてるのを見たときは『翔君、やるう！』って思
った。

だから翔君と付き合いはじめたの」

「はい出来た。豚肉とイカ入り焼き。おまけで揚げ玉もトッピング。
さっ、二人とも座って、食べて食べて。

あ、青のりとタレとマヨネーズはつけ放題だよ。

ただし、タレは二度塗りしないでね、青のりが容器に入っちゃうか
ら」

vol.19【ずっとそのまま 第3話】

あたしたちは、翔君に勧められるままに丸イスに腰掛けた。業務用の大きなマヨネーズの横に、青のりの入ったビン、その横に並々とタレが入った金属の容器が置かれている。容器にも『タレは二度塗りしないでください』と書いてある。

「もつとタレつけたいときはどうすんの？」

「ウチはねえ、タレの容器の中に、

ハケだけじゃなくて小さいおたまが入ってるから」

確かに容器の中にはおたまとハケが入っていた。

タレを並々とお好み焼きにかけ、

マヨネーズと青のりも盛大にかけ、一口食べてみる。

「どう、みうな」

「おいしい」

「ハッハッハ！ ありがとう。あ、これサービスね」

翔君は、カウンターからジョッキに入った生ビールを二つ差し出した。

ビールの勢いも手伝って、あたしたち三人は、

お好み焼きを食べながら楽しいひとときを過ごした。

しかし、あたしはただお好み焼きを食べに来たんじゃない。

手はじめに、翔君と宇崎との出会いから聞いてみることにした。

翔君も、謎の多そうな人だ。

宇崎だけではなく、翔君のバックグラウンドも気になった。

翔君の話によると、宇崎との出会いは中学生のとき。

バスケット部の一年後輩として知り合ったそうだ。

（ってことは、翔君って、二十七歳？

うわっ！ あたし達とおんなじくらいだと思ってた。

麻巳子もあたしも「君づけ」で呼んじゃってるけど、いいのかなあ……）

翔君の顔を見る。「さん」で呼ぶのはおかしい。

「君」の方が似合う。それだけ翔君は若く見えた。

でも、「カワイイ」という形容詞は似合わない。

かといって「怖い」というのもおかしい。

今までいくつもの修羅場をくぐり抜けてきた苦勞人。

そんなオーラが伝わってくる。でもやっぱり「君」が似合う。不思議な人だ。

二人とも、あたし達のような私立のエスカレーター式

お嬢様学校ではなく、公立中学に通っていたという。

その頃から美大を目指していた宇崎は、

中学三年のとき必死に勉強し、地域一の進学校に合格。

一方、当時はノンポリだった翔君は無試験で入れる、

ヤンキーだらけの男子校に入学したという。

高校は別になったものの、中学の頃から兄弟のような関係だった

二人の結束が崩れることはなかった。

「高校に入ってから、バンドを結成したんだ。

宇崎がメンバーだったこともあるけど、

すぐに勝手に脱退しやがった。

それ以来、入って出て、入って出ての繰り返し。

俺こう見えてもバンドのリーダーで、やる気のない奴や、

素質のない奴はすぐに蹴つてたから。

やっと今のメンバーに落ち着いたのは、つい去年。

一応プロ志向なんだけど、プロからはもちろん、

未だにインディレーベルからも声がかからなくて。

ライブの集客も、二十人入ればいい方」

翔君が組んでいるバンドの名は「RITTER」

RITTERは「ゴミ」「病気の名前」「有名ギターのブランド」という

いろいろな意味が混ざっている単語。

モデル並みのプロポーションを持つ美人ボーカル「ミワ」を中心とした、

ギター、ベース、ドラムの四人組のバンド。

後ろを見ると、自分達でパソコンを使って制作したと思われる

「RITTER」のポスターが貼ってあった。

お好み焼きの煙で、茶色くすすけてはいたが。

「結構サマになってるでしょ？ それ」

「うん、ミワさんも目立ってるけど、翔君も目立ってる。

他の二人もカッコいいけど、わりと普通っぽい感じだね」

「そうだね。シンプルな編成のバンドだから、

ベースとドラムはただ黙ってリズムを刻んでくれるだけでいい。

だからルックスより、テクニクが優れてる奴を取った。

その方がボーカルやギターが思いつきり暴れられるから。

俺はミワのお守り役っていうか、用心棒みたいでしょ？」

「ああ、そんな感じだね」

「確かに二十七でチャラ男ってやばいけど、

やっぱりバンドっていうのは……まあ、こういうこと、

自分の口で言うことじゃないんだけど」

vol.20【ずっとそのまま 第4話】

「え？ どういうこと？」

「いやあ、バンドって、俺みたいな悪そうなキャラが一人いた方がビジュアル的にも目立つでしょ？」

それに、俺はやっぱ、お好み焼き屋じゃなくて、バンドとして成功したいから。ジジイになってもこの格好はやめないよ」

「そっか、翔君にとっても、チャラ男の格好はヨロイ……」

ジュワーーーーー！

翔君が、お好み焼きの種を鉄板に流した音で、あたしの言葉はかき消された。

「ん？ なんかつた？」

「いや、なんでもない……」

あちゃー「翔君にとっても、チャラ男の格好は鎧なんだね」とはつきり言って、そこから宇崎の話に持って行こうとしたのに。それからは翔君の武勇伝ばかり。肝心の宇崎の話はほとんど聞けない。

終電の時間が迫っていた。あたしは単刀直入に聞いてみようことにした。

「ねえ、翔君。う、宇崎さんって、彼女いるのの？」

（やばい！ 噛んだ！）

翔君は「わかってたよ」とでも言いたげな笑いをあたしに向けてきた。

「宇崎に彼女？ ハッハハ！ あいつに彼女がないわけないっしょよ。」

俺の知ってる限りでは、あいつは女が切れたことなんてないよ。

こないだ宇崎に会ったら『年上の女と付き合いはじめた』って言うてたなあ」

「年上の女と付き合いはじめた。しかも“こないだ”ってことはつい最近だよ……翔君、その女の名前ってわかる？」

「名前？ えーっと確か『えみ』だか『えみこ』だか……」

「えみり？」

「あ、そうそう。えみりえみり。やっと思い出した。えみりだえみり」

「そつか『えみり……』」

「え？ どうかしたの、みうなちゃん」

「……部長ってば」

「あ、バイトの時間だ！ 翔君、ゴメンまた来る。みうな、帰ろう！」

「や、そんなにせかさなくても……」

「帰ろう！」

ボタン！

「はて？ 俺、なんか変なこと言ったか？」

vol.21【ずっとそのまま 第5話】

さっきの道を引き返して、渋谷駅に戻る。

タクシーで帰ってたが、こんな狭い道では通れないし、捕まらないだろう。幸いオタク男の数は、行きよりは減っていた。

「え？ なに？ 麻巳子ってこんな時間からバイトしてるの？」

「してないよバイトなんか。逃げ口上。」

「やっぱ、みうなって宇崎さんのこと好きだったんだね」

「う、うん、まあ……」

「みうな」

突然、麻巳子が立ち止まった。あたしの正面に向き直って、腕組みをする。

「ちょ、麻巳子？ 終電行っちゃうよ」

「みうな、これだけははっきり言っておく。」

もうお好み焼きとかビールとか、カロリーの高いものは絶対に食べたり飲んだりしないでね」

「それは、わかってる」

「ならいい。それと、みうながこの先、

モデルとしてどんなに綺麗になっても、

宇崎さんはあんなに綺麗にしないと」

「それもわかってるよ。あたしはモデルとして商品になるんだから。

あの宇崎さんが、商品に手を出すわけないでしょう？」

「そこまでわかってるならいい。」

さすが『DIY』に勤めてるだけのことはあるわね」

「でも、麻巳子……」

いつのまにか、あたしの目から涙が溢れてきた。鼻水も。

「あたし宇崎さんのこと、好きになっちゃったよ、好きになっちゃうよ。なのに、なのに、」
「それ以上、言わなくていいよ」

麻巳子は、あたしのでかい図体を抱きしめた。

涙も鼻水もドバドバ出てきて、麻巳子の脳天に垂れ落ちる。

「ごめん。翔君って、ちょっと鈍感なところあるから」

「大丈夫」

「たぶん、初恋だよね。みうなにとっては」

「うん」

「みうなと話していると、たまにその『えみり部長』の話が出てくるけど、そんなにいい女なの？」

「うん。三十過ぎてるけど、すごくカッコいい人」

「そっか。初恋の相手が、上司と付き合ってるなんて、ショックだよな」

「うん」

「あんまり、宇崎さんのこと、思いつめちゃダメだよ。そんなに魅力的な恋人がいるんなら」

「うん」

「あたしだって努力して、ワセダの男捕まえたり、翔君捕まえたりしたんだからさ。」

「女は誰だって努力すれば、綺麗になれるの」

「うん」

「みうなも、努力して綺麗にならないといけない立場に置かれたんだからさ、そのままですつといちゃダメ」
「うん」

「綺麗になれば、宇崎さんよりイイ男、きっと見つかるから」
「……。」

麻巳子の最後の言葉には、返事が出来なかった。

vol.22【名前が変わった日 第1話】

月曜日、いつものように会社に行くと、デスクの上に白い封筒が置かれていた。ひっくり返すと「辞令」とある。

（うつうつ、さつそくか……）

震える手で封筒を開いた。

【辞令】

「九月一日付で、総務部 高木みづなを、販売部（渋谷09店）に異動することを命ずる。

『DIY！ OUT OF BLACK』

代表取締役 小澤 喜代彦」

（あたしが、販売部に異動？ し、しかもマルキューの。もちろん、このままの体型じゃないよねえ……九月一日ってまだ三ヶ月以上あるし。この間に痩せろってこと？）

辞令を手に固まっていると、えみり部長が話しかけてきた。

「高木さん。辞令、読んだわね」

「はい」

「今すぐ私と一緒に、宣伝部の撮影スタジオに行きましょう」

「え、もう、モデル写真を？」

「飯のね。もちろん、あなたをこれから

モデルとしてどう売り出していくか、

話し合いながら進めていくから。宇崎さんもいらしてる」
「ハア……」

vol.23【名前が変わった日 第2話】

七階の宣伝部の撮影スタジオに着くと、すでに専属カメラマンが到着していて、撮影の準備もできていた。宇崎さんの姿もある。

「ああ、榊部長、みうなさん、おはようございます。みうなさん、時間ありません。すぐにメイク室へ」

メイク室には、すでに専属のメイクさんとスタイリストさんが到着していた。

あたしはメガネを外され、今までにしたこともないような派手なメイクをされた。

「これ、今日の衣装です」

スタイリストが、あたしに衣装を手渡した。

(……。)

「レパブリカ」に見学に行ったとき、ディスプレイに飾ってあった、水色に赤いハートのアップリケのついた、

一番力ワイくて目立つブラジャーとパンティ。

しかも、あたしの体のサイズに合わせてキングレサイズに仕立ててある。

「あ、あのう、マジでこれに着替えるんですか？」

「はい。なにか？」

「あー、ちょっと恥ずかしいことなんですけど」

「どうしました？」

「あたし、ワキ毛と、アンダーヘア、ずっと処理してなくてですね……」

「ずっと？ 三ヶ月ぐらいですか？」

「や、少なく見積もって半年以上……」

「あらっ！ それは大変！」

とたんにあたしは、メイク室にいたすべての人間に囲まれ、素っ裸にされて仰向けにされた挙句、

ワキ毛、アンダーヘア、へそ毛、スネ毛……

とにかく全身のムダ毛というムダ毛を、毛抜きで抜かれる＆カミソリで剃られるという、

（どんな罰ゲームだよ）

と思わずにはいられない辱めを受けた。しかも、

「うわっ！ この人スネ毛ボーボー！」

「乳輪にまで毛が生えてる！」

「女でこんなにワキ毛伸ばしてる人見たことないよぉ」

「アンダーヘア長すぎ！ 抜いてる暇ないから、ハサミで切るわよ！」

「へそ毛も濃い！ 本当にこの人がモデルになるの？ 信じられないー！」

という、罵詈雑言のオマケつきで。

数人で寄ってたかって、毛抜きでワキ毛とアンダーヘア、へそ毛をバンバン抜かれている最中、そのあまりの痛さに、

「いだ！ いだだだだだ！」

と思わず大声を出してしまったが、

「今まで、女として当然のことを、サボってきた罰です！
あなたはモデルになるんですから、美肌と痩身だけでなく、
ムダ毛にも気を配ってください！」

と誰かに言われたときには、

「はい」

と素直に謝った。

メイク室にいたすべての人間が、女だったことが
せめてもの救いだったが、床に落ちた毛を、
スタイリストの助手が、ホウキとちり取りで渋々かき集めていて、
それが「美容院に行つて、ロングヘアの女性が
ショートカットにしたときぐらいの量」に見えたときは、

（今までのあたしって、女として最悪だったんだ……）

と再び素直に反省した。

Vol. 24 【名前が変わった日 第3話】

ムダ毛処理が終わり衣装を着て、メイク室にある全身が写る大きな鏡で最終チェックをする。

メガネを外されたので、ボヤケてはいたが、とてもモデルには見えない。女力士か芸人かという感じだった。

「ま、最初のコンセプトは、これだから」

誰かが言った。あたしはその格好でメイク室を出た。

「ギヤハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

とたんに、その場にいた全員の激しい笑い声が耳を劈いた。そのときの恥ずかしさといったら、大会議室で、宇崎さんに勝手にCGを晒された時の比ではない。

「や、やっぱC Gじゃなくて、本物使って正解ですねえ。インパクトがもう……」

カメラマンは、あたしの下着姿をパシャパシャ撮った。時々吹きながら。

「はい、じゃあ次は……ぷつ。両膝を床につけて、足をちよつと開いて……ププッ。」

あ、頭に両手を回して……ブホッ！

全身を心もち後ろに反らせて……プハッ！」

さすがにムカついた。

「はい、これで撮影は終わりです。僕もあなたみたいなキワモノ……いや、個性的なモデルさんを撮影するのははじめてで……何度も笑っちゃってごめんなさいねホントに」

（絶対、許しません。ちくしょー、マジで綺麗になって、テメエの鼻あかせてやる！）

メイク室に戻り、化粧を落としてメガネをかけて制服に着替える。

今日の「衣装」は、タダでもらえるという。

絶対つける機会がないと思われる、水色に赤いハートのアップリケ、キングレサイズの気のふれたブラジャーとパンティを。

まあ、こんなシロモノ「五千円やる！」と言われても誰も欲しがらないだろう。

あたしだって、こんなものもらっても、嬉しくもなんともない。

（これが「ギャラ」ですか）

でかいため息が一つ出た。

vol.25【名前が変わった日 第4話】

メイク室を出ると、すでに写真が何枚か出来上がっているようだった。

撮影スタジオにはパソコンとプリンタが置かれていて、高機能のデジカメで撮った写真をすぐにプリントアウトできるようになっている。カメラマンや、メイクさんに混じって、宇崎さんやえみり部長が写真を見ながら真剣に話し込んでいる。

「まあ今日は仮撮影で、たしかに最初はこういうコンセプトですけど、

さすがにこの写真は使えませんねえ。カメラマンさん気持ちはわかるけど、

もう少し真面目に撮りましょうよ。」

全部ピントブレてるじゃないですかあ！」

宇崎さんの声だ。それにつられて全員が笑っている。

宇崎さんも人をおちよくるのもいい加減にしてほしいなあ……。

「皆さん、彼女の芸名はすでに決めてきました。

写真の右下に大きく『MYU—NA』というクレジットを載せます」

宇崎さんは、すでにあたしの芸名まで

考えてきているようだった。MYU—NA？

「みづなさん」

急に、宇崎さんがあたしの方に向き直った。

「高木みづなさん。あなたの名前は、今日から『ミューナ
トップモデル』『ミューナ』です！」

こうして「高木みづな」という名は封印され、
あたしは今日から「ミューナ」と呼ばれることになった。

vol.26【あたしはミューナ 第1話】

「ミューナ」になったあたしの生活は、ガラリと変わった。

もちろん全て会社の経費ではあるが、メガネをやめて、コンタクトにしろという命令を受け、次の日保険証持参で、コンタクトレンズ屋に行った。

その足で自由が丘に本店がある、麻巳子が働くエステティックサロン「GET CUTE」に出向き、美肌と痩身、そして昨日の撮影で、一気に大問題に浮上した「ムダ毛」を、今後どうしていくかのカウンセリングを受けた。

さらに、食事制限のアドバイスを受け、綺麗になるための分厚いマニュアルをもらって日吉のアパートに戻った。

「GET CUTE」に限っては会社の経費ではない。トップモデル「ミューナ」を「DIY」とともにプロデュースしていくため、あたしは「GET CUTE」の広告塔の役目も兼ねることになった。美肌も痩身もムダ毛処理も全てタダ。

シヨボかったはずの「三時間体験」がいきなりVIP扱い。店員の対応も設備も全てが180度ガラリと変わっていた。

その間に本番の写真撮影をこなし「DIY」各店舗に、インパクト特SSS級のデブモデル「MYUNA」の大きな広告写真が飾られるようになった。

やはり、最初のうちは、会社に抗議の電話がバンバン来たという。その抗議電話全てに会社側は

「ミューナはこれからどんどん綺麗になっていきます」と答えたらしく

「ミューナ」は一躍一流“デブ”トップモデルとしての地位を築き上げた。

人気ギャル向け雑誌に「MYUNA」がモデルの

「DIY feat. Republica」の広告が掲載されるようになった。

vol.27【あたしはミューナ 第2話】

総務部にフルタイムで出勤することはなくなった。

そんな生活を送っていても、給料はちゃんと支払われる。

しかも、あたしは会社の専属モデルということで、

その分、給料を上乗せされることになった。

増えた給料で、生まれてはじめて自分自身にお金を使うことを覚えた。

デパートで化粧品を一式買い揃え、

空いた時間には自分で化粧のレッスンをした。

エステに通うのは週一〜二回程度。食事制限が最も重要と言われたので、

真面目に食事制限もした。

大好きなビールや甘物、油物を控え、なるべく自炊をし、

3：7の割合で麦の混じったご飯を主食とした。

肉をなるべく少なくし、緑黄色野菜、その他の野菜、魚、卵などを中心とした食生活を送るようになった。

エステのマニキュアルを見て、自主的に毎日のように半身浴を行った。

もちろん、運動も欠かさなかった。

会社の経費でスポーツジムの会員になったあたしは、

ジョギングやエアロビクスは膝に負担がかかるからという理由で、水泳や水中ヨガを中心に、週三回スポーツジムに通うことになった。

こんな努力、生まれてはじめてのこと。「高木みづな」から「ミューナ」に変身したあたしは燃えていた。

こうして、あと数日で九月一日、という日を迎えた。

「MYUNA」の二回目の広告写真、撮影日である。
もはや、あたしは「デブ」ではなかった。

しかし「モデル」と呼ぶにはまだ難がある。宇崎さん曰く、

「健康的なモデル体型になったが、色気ゼロ。
欲を言えば『華』がもっともつと欲しい」

ぐらいのルックスを手に入れたあたしは、
撮影後、正式に九月一日から「DIY！ 渋谷09店 販売員」と
して、

週四回出勤し、残りは全てスポーツジムと
エステに通う生活を送ることになった。

vol.28【あたしはミューナ 第3話】

初出勤の日、あたしはあらかじめ会社から支給されていた「DIY」の服に身を包み、マルキューの社員通用口から店内に入った。

すでに「高木みうな」ではなく「MYUNA」という販売員用バッジができていた。それを左胸につけて店舗があるフロアに向かう。

異動前に紹介されていた愛店長（二十一歳）
あゆみ販売員（二十歳） カンナ販売員（二十歳） が先に出勤していた。

あたしの初出勤に合わせてか、先日取り直した広告写真が店の一番目立つところに飾られていた。
このときの衣装は「レプリカ」のショッキングピンクのブラジャーとパンティに「DIY」の黒のスケスケキャミソールにサンダル。

いかにも

「これからセックスするところで、男に脱がされている真っ最中」というイメージの写真である。

直接は見えないが、その時支給されたショッキングピンクのブラジャーとパンティをこの日、あたしは身につけていた。

「つけてこい、アレ」という会社側の命令で。

ブラジャーもパンティも、キングLサイズから普通のLサイズを身につけられるぐらいにまで、あたしは痩せていた。もっと詳しく言うなら、ブラのカップはアンダー80のDだ。

vol.29【あたしはミューナ 第4話】

あたしは店内に足を踏み入れ、三人に向かって挨拶をした。

「あ……先日はどうも。今日から異動になりました、高木です」
「愛です」

「あゆみです」
「カンナです」

三人は、あたしに顔だけ向け、ごく短く挨拶し、仕事に戻った。

（うーん、うまくやっていけるのかなあ？）

ボーっとしていると、愛店長に怒鳴られた。

「なに突っ立ってんの！『レパブリカ』のコーナーの品出しして！早く！」

「ああ、はい」

ドスン！

愛店長は音を立てて、目の前に『レパブリカ』の商品が入っているダンボールを置いた。

「あのう、愛店長。あたし販売の仕事はじめてで……どういう風に品出しすればいいのか教えていただけますでしょうか？」

「品出しの仕事は、はじめてでも誰にだってできる！一番目立つところに、売れそうな商品を置いて、あとはテキトーに。開店時間の十分前までには終わらせて！」

はじめて販売の経験をするあたしに対して、なにも教えてくれないの？ しかも、ぶしつけな言い方だなあ……と思ったが、あたしは言われるままにダンボールを「レパブリカ」のコーナーに運び、はじめての作業をした。

ダンボールを開けた。案の定、どの下着も全部ド派手。どれが売れ筋商品なのかなんて、見当もつかない。

混乱したままダンボールをあさっていると、

今、身につけているのと全く同じデザインの下着の上下があった。

（そうか！ これをマネキンに着せればいいんだ！

広告写真も、同じ下着なんだし。客に売るとき、一番話題になるし）

あたしは、勘と感覚だけで「レパブリカ」の品出し作業をした。

（一番上の棚には、暖色系の柄つきの商品を置こう。

オレンジ、赤、黄色、薄めのピンク、薄めの紫……

あ、あれあるかな、あった！ 水色のハートのアップリケ付き！

うわっ！ 同じの十枚ぐらいある。これが『売れ筋』かあ、

とりあえず四枚ぐらい置いて……ちょっとうるさいな、

アクセントに緑でも一つ置いておこう）

（真ん中の棚には寒色系と。水色のアレをしつこく置いて、

青、オリーブ、白、深緑、濃い目の紫、緑、黄緑……一応、赤一つと）

（一番下には、地味なの。って地味な下着一つも無い

……うわ、タイムリミットまであと五分！ ええい、テキトーに置いてしまえ〜）

開店時間十分前、あたしはまだ商品の残っているダンボールをバックヤードに片付けた。

vol.30【あたしはミューナ 第5話】

「ミーティング始めるわよ」

あたし達三人は、愛店長の元に駆け寄った。

愛店長があたし達に昨日の売り上げと、今日の売上目標を告げた。

「昨日の売り上げは、あたしが三十四万。あゆみが二十八万。

カンナが二十一万。カンナ、ここんとこ調子悪いねえ？」

「申し訳ございません」

「今日の売り上げ目標。あたし四十万。あゆみ三十五万。

カンナも三十五万。ミューナ五十五万」

「え！」

「大丈夫よ。ミューナはウチの広告塔なんだし、

話題性もあるから、初日であゆみもカンナも抜ける。

それに、初仕事であれだけできれば、五十五万なんてすぐよ」

愛店長はそう言って笑った。

忙しい中、あたしの仕事っぷりをちゃんと見ていたのか……。

「もちろん、あゆみもカンナも、初仕事のミューナに

初日でいきなり売り上げを抜かれないように、

二人とも、六十万以上売ってやるつもりで、気合を入れること！」

「はいっ！」

「あ」

「ミューナ、返事！」

「は、はいっ！」

（すこっ！ 自衛隊みたいだ、今日は気合い入れなきゃ……）

♪チロリンチロリンチロリン。

いきなり、マルキュー全体に全く気合の入っていないチャイムが鳴り響いた。

「みんないつものように。ミューナ、あれは開店時間三分前の合図よ。」

開店から五分間は、あそこに立って手を前に組んで、

お客様が通ったら『いらっしやいませ』って言うってお辞儀して。

一歩も動いちゃダメだし『いらっしやいませ』以外の言葉は

決して言わないように。笑顔でヨロシク」

「はいっ！」

「あ、そんなに気合い入れすぎないでいいから。」

一日中ピンヒールで立ってるのって結構しんどいし。

64%ぐらいのさじ加減でお願いね」

「64%って……微妙だなあ」

vol.31【お得意様は苦勞人 第1話】

その日、ほとんど接客らしきことをしていないのに、朝のミーティングで店長から指示を受けた

五十五万のノルマは、夕方までにはクリアしていた。

「DIY」の商品も「レパブリカ」の商品も、

あたしが突っ立っているだけで飛ぶように売れた。

もちろん「ミューナ」として、ある程度名前が

売っていたからこそできたワザなのだが

予想以上の「ミューナフィーバー」に、

あたしはすっかり舞い上がっていた。

（初仕事としては上等）と思っていた時、どこからともなく、ヒソヒソ声が聞こえてきた。

「あれ、ミューナじゃん？」

「ミューナじゃんねえ？」

「ずいぶんスタイル良くなったね。胸もでっかいし」

「雑誌で最初の写真見たときは、激しく笑ったし、ムカついたけど」

声のしたほうを振り向くと、同じ制服を着た

金髪的女子高生二人組と目が合ってしまった。

「あ、バレちゃった」

二人は、あたしと目が合った瞬間わざとらしくそう言って

顔を見合わせて笑った。小声で短く話し合いをした後

二人はあたしに向かって、おもいきり作り笑いを浮かべながら

「DIY」店内にのっしのっしと入り込んできた。

「あ……いらっしゃいませ」

「あたしたち、ミューナのファンなんです！」

ミューナとお話できて光栄です！」

「ミューナの最初の写真見たときにはドン引きしたけど、今のあの写真すっごい……セクシー？」

「ぎゃっははは『セクシー』って『セクシー』って？

なに言ってるんの失礼な、そういうときは

『キレイになっただんですね』って言つとくの！

ああ、ごめんなさいねウチのバカが。

ミューナって、キレイになっただんですね〜！」

「は、はあ……」

「ミューナのなにかカッコいって

『選ばれてなんの努力もしないで』モデルになったとこ！」

「そう、すごくカッコいいです！ 尊敬してます！」

「ん？ んんんん……」

「たまにいますよね『将来の夢はモデル』とか

言ってる痛い奴。なれるわけないのにね」

「ウチのクラス、もつとキモイのいるよ。」

『小説家』とか『漫画家』とか『歌手』とかね。

そんなの、なれるわけないのにね、プツ」

「あーあー、わかるわかる〜。そういう奴ってさあ、

ブログでキモイ小説とかキモイマンガ公開しちゃったり？

『歌手』とか言ってる奴に至っては、

駅前でギター持って歌っちゃったり？

高校生にもなつてアイドルのオーディション受けちゃったり？

ぎゃははは、ダセーッ！ 一円ももらえないのに」

「そうそう『将来の目標持ってる奴』って、キモイし絡みづらいよね。

そんなの、なれるわけないのにね」

「いいじゃんねえ、ミューナみたいに

『選ばれてテキトーに』モデルやって

テキトーにショッピング店員とかやってれば」

「まあ、あたしらはミューナみたいにカッコよく

生きるのは無理だけどさ。単発のバイトでもやって、

一月に十万ぐらい貰って、その金で服とかバッグ買って、

ケータイの金払って、結婚するまで

ずっと家にいるのが一番楽ちゃんね」

「そーだよ。 だいたい、勉強強して大学行って

就活したところで、内定取り消されるなんて、痛すぎるよね。

なにことも一生懸命やればやるほど、バカ見るし損するのにな」

「あのお、お客様……」

「ごめんなさい。今日はあたし達、なにも買いませーん。

ホントごめんなさい！ だって、ミューナ見ちゃったから……グ

ハハ！

今度のバーゲンのとき、親に金貰ったら、

ソッコーで大量に買いに来まーす！ バイバイッ！」

vol.32【お得意様は苦勞人 第2話】

二人が店を出て行ったあと、あゆみとカンナが小声で話しかけてきた。

「どお？ ミューナ、勉強になったつしょ？」

「勉強になったもなにも、ああいうのは十八になった途端に苦勞するタイプつしょ？」

「なんだ、わかってるじゃんミューナ」

ぱっしーん！ ぱっこーん！

あゆみとカンナは、あたしの背中を交互におもいつき叩いた。

「ミューナにはぶっちゃけるけどさあ、

あたしら二人とも学歴高卒ってことになってるけど、実は同じ高校を同じ日に中退してんだあ」

「えー！」

「しーっ！ ちゃんと高校を卒業してるのは愛店長だけ！」

「それに、あの二人組よく来るけど、両方髪の毛金髪だったじゃん」
「っていつか、二人ともしっかりピアスまでしてたけど。まさかさつきのも……」

「そう。高校中退組。しかも二人とも十八なんてとくに過ぎてる」
「職業は今流行りの『ニート』カムフラージュで制服着てるだけ」

「うそっ！ 超苦勞人じゃん！」

「ウチのお得意様って、ああいうのばっかだから。絡みづらいのはこっちだったの。」

でも『お得意様』を怒らせちゃダメよん。あ、いらっしやいませー

！」

（うーん、さっきみんな無愛想だったのは「品出し」が一番忙しい仕事だったせいかな。それにしても、愛店長も、あゆみもカンナもプロだなあ……）

あたしも高校生の頃は、麻巳子と二人でつるんで

ああやって世の中をナメていた。三人ともさっきの二人組のような高校時代を経験した上で、ここのショップ店員をやっている。愛店長、あゆみ、カンナ。誰の人生もバカにすることなどできない。

（でもさっきの二人、あたしらが高校生やってた頃よりタチ悪い。二十二歳か。歳取ったな、あたしも）

負けてはいられない。ウチの会社の基本ポリシーは「フレンドリー」だが、

総務部の一緒に温泉に行つてぬるま湯に浸かるような「フレンドリー」と、

販売部の一緒に戦場に行つて共に戦うような「フレンドリー」とでは、

明らかに「フレンドリー」の質が違う。

その日の売り上げは、愛店長四十七万。あゆみ三十九万。カンナ三十六万。あたしが七十八万。

全員ノルマをクリアしたうえ、愛店長の言つとおり、あたしの売り上げがダントツだった。

Vol.33【お得意様は苦勞人 第3話】

翌日から、戦場のような日々が続いた。
相変わらず、あたしのノルマが一番多い。

二日目にしていきなり、八十五万と言われたときは
ビックリしたけれど楽々ノルマクリア。

毎日毎日無茶数字を課せられても、すべてクリアしていた。

しかし、あたしの勢いは、

二週間ほど働いたところに、いきなりストップした。

買い物目的ではなく「ミューナ見物」目的で、

女子高生が大量にやってくるようになったからだ。

開店時間から午後三時ぐらいまでは、

平日が休みになるOLや、若い主婦、年齢・職業不詳の

怪しげな女などが主に店に来て、とりあえずなにか買っていく。

しかし、三時を過ぎると、いろいろな制服を着た女子高生の

集団に囲まれ「DIY！ 渋谷09店」は動物園と化す。

女子高生達は決して店内には入らず、

遠巻きにあたし達四人を観察しながら、

「ミューナだ」

「ミューナが接客してる」

「ミューナがモップかけてる」

「あ、肩からブラヒモ見えた。スゲー色」

「ちよっと『レパブリカ』冷やかしていこうよ。」

うわ、スゲーセンス！ これもこれもこれも！」

女子高生達は、店舗の死角にある『レパブリカ』コーナーの原品を、ベタベタ触って手垢まみれにしながら、小声でブツクサ言っている。話題もあたしだけではない。

「あの、あれあれ、あゆみだかカンナだか、こないだ雑誌に載ってたよ」

「あの二人もモデルなの？」

「二流のね」

「なになに？ 『二流のモデル』って？」

「なんか、ファッション雑誌じゃなくて、情報誌？」

あれの『最先端！ お台場デート』なんかに偽カッパルの女役で出てきて、

デートのフリしてるとこ、写真に撮られてんの！」

「ダサッ！」

「ダサいよね、あんなのに出て幾らもらえるんだろうね？」

「そんな痛いことしながらじゃないと

やっていけないほど、ここ給料安いのお？」

「うわっ！ここに就活しようと思ってたけど、やめといた方がいい？」

「ショップ店員なんてどこも給料安いよ。

絶対事務とかの方がカネになるよ」

「そーだよな。ショップ店員は立ちっぱだけど、事務なら座れるし」
「事務ってパソコン出来ないとダメっしょ」

「え〜！ パソコンなんて、

インターネットしかできない！」

「それヤバイって！ ワードとエクセルってヤツ？」

あれ使いこなせないと事務になてなれないよ」

「あんたできるの？」

「……できない」

「あっはっはっはっは！ ウケる〜！」

「まったく、どいつもこいつも。」

vol.34【お得意様は苦勞人 第4話】

小声でこっそり言ってるつもりだろうけど、
途中から大声になってるし、

パワーポイントやアクセスもセットで入ってる

『オフィス』って知ってるか？

『オフィス』を全部使いこなせないと事務員になんてなれないし

「DIY」は給料こそ安いけど、販売員も事務員も全員正社員だ！

あたしや愛店長やあゆみやカンナの陰口を叩きながら、

携帯のカメラでフラッシュ機能を使ってバンバンバン

あたしの写真を撮る女子高生もいる。

全員に共通しているのは、店の敷地内には絶対に、
誰一人として入ってこないところ。

中には、毎日のように集団でやって来て、

その内の一人を、ボン！ と敷地内に突き飛ばし、
あたしたちに「いらつしゃいませ」と言わせては、
即、集団に逃げ帰り、

「お前スゲー、勇者〜。よし、今度は誰がやる？
じゃあ、あんたに決定！ せーのっ！」

ボン！

「いらつしゃいませ」

「スゲー！ 勇者〜！ よーし、今度は誰……」

という「なにが楽しいんだか全く理解できない
頭の悪いハタ迷惑な遊び」を繰り返す悪質なグループもいた。

こうして、あたしが販売員になってからしばらくの間

「DIY！ 渋谷09店」の売り上げは低迷した。

同時に、同じフロアの他店から、

「おたくに集まってくる野次馬のせいで、客が来ない売り上げ伸び
ない」

というクレームも毎日来て、

あたし達四人は毎日肩身の狭い思いをしていた。

この異常事態を重く見た会社側は、幸運の女神として、

総務部のえみり部長を応援販売員として一週間派遣してくれた。

「DIY」のパンツスーツに身を包んだえみり部長からは、
ものすごいオーラと貫録がにじみ出ていた。

常時七十人はたむろしている女子高生達も、

えみり部長の存在感と目力だけで、次第に数が減っていった。

悪質なイタズラを繰り返していた、手に負えないあのグループも、
えみり部長を目の前にすると、無条件に白旗を上げるしかないよう
だ。

いつものように、ボン！ とやると、すかさずえみり部長があたし
の前に出て、

「いらっしゃいませ。お客様、今日はなにかお探しで？」

「あ……あたしたちは、ミュー」

「ニュー？ あら、ありがとうございます。」

本日入荷の新作をお買い求めにいらしたのですね？」

「いや、そうじゃなくってミューナを……」

「ミューナ？ ミューナは売り物ではございませんよ」

えみり部長がニヤリと微笑を浮かべながら言うと、
女子高生達はなにも言えずに去ってゆく。

こうして、たった一週間で「DIY！ 渋谷09店」に
動物園感覚で来るハタ迷惑な女子高生は一人もいなくなった。

「よしよし、邪魔なギャルちゃん達が一匹もいなくなった。

でも、これで『DIY』の売り上げが下がったら、

あたし左遷されちゃうかも。ハハハハハ！」

えみり部長はそう嘯いていたが、逆にギャルちゃん達の間で

『DIY』や『レパブリカ』により箔がついたらしく、

バーゲンの時期でもないのに、売り上げが毎日面白いほど伸びるようになった。

「あたしも将来、ミューナやえみりさんのような

カリスマ店員になりたいです！」

新規客は、ほぼ全員目をキラキラさせてこう言う。

そんな客の表情を見るたびに、あたしは複雑な気持ちになっていた。

（えみり部長とあたしかあ……えみり部長の方がどう見ても綺麗だし、

カッコいいもんね。そりゃ好きになるよ。宇崎さんも）

vol.35【蔑みのニックネーム 第1話】

「は、今度は取材？」

マルキューの販売員をはじめて四カ月ほどたったある日、あたしは、いつも『MYUNA』の広告を載せてもらっている、某ギャル向け雑誌の取材を受けることになってしまった。

「えみり部長、なにを話せばいいんですか？」

「や、そんなに深く考えなくてもいい。今のミューナの脳みそに詰まっていることを、全部喋ればいいだけ」

「そんなことしたら、またなんちゃって女子高生がわんさか来ますよ」

「そんなときは、またあややってクソガキども撃退しに行くわよ」

「えみり部長のパフォーマンスそのものがウチの商品になってますけど」

「あつそう。じゃあ、今度『応援』に行くときは、本物のマシンガンでも持つていこうかしらねえ？」

「受けます……取材」

「渋々って感じねえミューナ。取材そんなにイヤなの？」

「イヤですよ。聞かれることはだいたいわかってますから」

「さつき『受けます……取材』って言ったわよね。自分の口で「でも……」

「いいから受けなさい」

vol.36【蔑みのニックネーム 第2話】

取材当日、あたしは中目黒にいた。

場所は総務部の、仕切り版で仕切られただけの『応接室』
昔の仕事仲間に話がまる聞こえだ。

金髪で全身原色の服を着た、あたしと同年ぐらいの
ギャル雑誌のライターは

「ここならミューナさんの“本音”が聞けると思ひまして」

と言っていたが、場違いもいいところだ。

「では、さっそくインタビューをはじめたいと思います」

「ハア……」

「まずは、この写真を実際に撮影された時のエピソードをお願いいたします」

ライターは、あたしの『はじめての宣材写真』を目の前に置いた。

カチンと来た。

「その写真撮られた時はあ、あたしはまだいっぱしのモデルじゃなくて、
ムダ毛処理もずつとしてなくて女として最悪でした！

そのカツコでメイク室の外に出た瞬間、スタッフ全員に大爆笑されて、

カメラマンに笑われながら何十枚も写真撮られたけど、

そのカメラマンも仮撮影だと思って……仕事なめてたのかな？

その場でプリントアウトした写真、全部ピンとずれてましたよ。

もちろん、そのカメラマンはとくにクビになつてて、

今はもっと腕のいい別のカメラマンがあたしの写真撮ってんだけど」

「そ、そこまで話していただけるとは……くくく」

「あんたも、ふざけたことばっかやってると、

あたしに取材するの、これが最初で最後になるよ！」

ギャハハハハハハハハハハハ！

総務部全員があたしの言葉に大爆笑している。

「やるじゃん、ミュージナ」

「もっと言ってやれ！」

「いやいや、もうなにも話さないでインタビュー終わりにして、その女出版社クビにさせてやれ！」

「どーせ写真で誤魔化すんだろうしね！」

「あはははははははははははははははは！」

古巣の総務部全員が味方についているようだ。

若いライターはガチガチに固まっている。

vol. 37【蔑みのニックネーム 第3話】

「ど、どうしましょう。前日に考えてきた質問、全部こんな感じなんですけど……」

「あんたプロのライターなんでしょ？
言葉を扱う仕事してるんだからさあ、

その場で質問ぐらいパツと考えられないの？」

「わ、わかりました……で、ではミューナさんの子供の頃について……」

「ああ、子供の頃ね。苗字が『高木』でルックスがこれだったから、ずっと『ブー』とあだ名されていじめられていました。ハイ次の質問どうぞ」

ライターは『はじめての宣材写真』をサツと隠して、言葉が続けた。

「た、大変恐縮ですが、その頃のミューナさんのことについて、詳しく教えて頂けますでしょうか？」

「大丈夫ですよ。あたしも『ミューナ』じゃなくて
『高木みづな』の頃の話をしたかったんです」

ライターは露骨にホツとしていた。

あたしは矢のようにしゃべりまくった。

「一応、これでも東京生まれで、私立の中学を受験してからは、エスカレーター式でお嬢様短大に行けるガッコにずっと通ってて」

「中学の頃はあたしのことを『ブー』って呼ぶ奴らを見つけては、その場で頭をグーで殴っていましたね。
でも、怒るのは疲れるんで、

高校の頃は陰口叩く女けっこういましたけど、全部シカトしてました」

「短大があつたのは横浜。短大に進んだ頃自宅を出て、日吉にアパートを借りました。今でもそこに住んでいます」

「中華街にはよく行きました。友達とご飯食べた。雑貨屋冷やかしたりね」

「これでも一応美容科卒なんですけどね。

この会社に内定が出た時は『販売員になれる！』って素で喜んでましたけど、

入社したらここに配属されて。理由はあたしがブスだったから」

そんなことをさんざん喋っていたら、ライターが『最後の質問』をしました。

「さっき、日吉にお住まいと伺いましたが、ミュー……いや、高木さんがこれ以上モデルとして有名になって、もっとお金持ちになったら、住みたい街ってありますか？」

「そうですねえ……日吉には飽き飽きしてますから、

田園調布にドーンとデカイ家建てて、

ツバメ囲って、メイド雇って、

左団扇の生活でもしたいですねえ」

東京生まれ東京育ちのあたしが本当に住みたいのは「海外」だが、わざと「田園調布」と言っちゃった。

vol.38【蔑みのニックネーム 第4話】

インタビューが終わり、同行のカメラマンがその場で写真を撮った。

「いいんですか？　こんななにもないところで写真撮影なんかして？」

「はい。大変貴重なお話を伺えましたし、インタビューのお時間は一時間しかいただいていないので。スタジオで写真を撮りたいのは山々なんですけど、時間が迫っておりますし」

「貴重な話？　ただの素人時代のぶっちゃけトークですよ？　こんなんが記事になっただいいんですか？」

「ぜんっぜん大丈夫です！」

写真を撮られまくっている間、あたしは若いライターがこっそり手帳に書いた単語をこの目でしっかり見た。

【トヨコミューナ】

『ミューナ』の前の『トヨコ』という文字。それで全てを察した。

（ここは中目黒。働いてるのは渋谷。短大は横浜。

遊んでたのは中華街。住んでるのは日吉。

麻巳子のエステは自由が丘。住みたい街は田園調布

『トーヨコ沿線で青春を過ごした女』でムリヤリまとめたいんだろ
うな。

この記事が発表されたらウザイギャルちゃん達に
『トーヨココミュニナ』って呼ばれるんだろうな。
安易だな。ちつきしょうめ)

その考えはズバリ当たっていた。

あたしの記事が載った雑誌が発売されたたん、
店に来る客が全員あたしのことを「トーヨココミュニナ」とあだ名し
た。

気に入らなかったが「トーヨココミュニナ」と呼ばれても、
あたしは「カリスマモデル兼ショップ店員」として、笑顔で働き続
けた。

vol.39【蔑みのニックネーム 第5話】

出版社から中目黒の本社に、その雑誌が何冊か届いた。
えみり部長がマルキューに巡回にやってきた時、
タダでもらったが読む気がしなかった。

しかし、電車で渋谷から日吉に帰る時、あまりにも暇だったため、
つつい自分の記事を読んでしまった。タイトルは

【本誌独占！ トーヨコミューナ4Pインタビュー】

記事はたったの四ページ。

メイン写真は、はじめての宣材写真と、
最新の宣材写真それぞれの別ポーズ、
プロのカメラマンが撮った写真だけど、これではただの使い回しだ。

さらに、写真の下に【使用前】↓【使用后】なんて書いてある。
取材時の写真は二センチ四方で一枚しか使われていない。
なによりムカついたのが、見開きページにデカデカと
踊っているふざけたキャッチコピー。

「トーヨコ沿線に住めばミューナみたいにカワイクなれるぞっつ！」

電車が日吉に着いたとき、あたしは雑誌を
アパートの途中の公園にあるゴミ箱に捨てた。

ガツカリした。

いくら綺麗になっても、あたしの扱いは
デブでブスな頃とちつとも変わっていない。

♪ピーポピーポピポピポポ♪

携帯が鳴った。えみり部長からだ。

「ミューナ、雑誌読んだ？」

「読みましたよ」

「あれ、どうせ捨てたんでしょ？」

「もちろんですよ！ 頭にくる……」

「拾ってきなさい！」

「は？」

「いいから拾ってこい！ 今のあんたのイメージは第三者から観たら、

使用前使用後って感じだし、トーヨコ沿線に住めば

ミューナみたいにカワイクなれるぞっつ！ って感じだし、

トーヨコミューナなの！」

ガチャ！

すぐさま公園に向かって走り、ゴミ箱を漁って捨てた雑誌を
拾おうとしたが、ない。ふとベンチを見ると、

気持ち良さそうに寝ているおじさんが、捨てた雑誌を枕にしていた。

シュッ！

あたしは、雑誌をおじさんの頭から引っこ抜き、

おじさんの罵声を背中に浴びながら全速力でアパートに戻った。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

あたしの記事には、おじさんのものと思われる、
出したてホヤホヤの、
ツーンと鼻をつく「白い液体」がべったりとついていた。

Vol. 40【折れた広告塔 第1話】

次の日マルキューに出勤すると、
店頭にあみり部長が来ていてさんざん説教を喰らった。

「あのファッション誌の出版元から苦情来た。
もう、金輪際『MYUNA』の広告は載せませんでした」

「……。」

「ミューナ、あたしが言ってること、意味わかる？」

「はい。スポンサーが一社減ったということですよ」

「そう。このご時世に『スポンサーが一社減る』ってことが、
会社にとってどれくらいダメージを受けるか、

これから身をもって知ることね」

「申し訳ございませんでした」

「じゃ、せいぜいお仕事頑張ってちょうだいね。」

痩せても枯れても、あんたはウチの広告塔なんだからさ」

えみり部長はそのまま中目黒に戻っていった。

愛店長、あゆみ、カンナのあたしに対する態度もがらりと変わった。

「トーヨコミューナ、ジュース買って来て」

とカンナに命令されると、たとえ接客中でもパシリを命じられる。
ジュースを買って戻ってくると、客があたしを見て笑いながら
レジで金を払っていて、レジカウスターの中にはカンナ。
売り上げもカンナに全部横取りされる。

「今日の売上目標。あたし六十万。あゆみ五十万。カンナ七十万。ミューナ五万」

「カリスマモデル兼ショップ店員」のはずのミューナがカンナの「パシリ」扱い。

いつのまにか「それ」が『DIY』の商品になってしまった。

そんな凄惨なイジメを受けても、あたしは言われるままに「トーヨコミュニティ」を演じきるしかなかった。

週に四日、マルキューに出勤して販売の仕事をこなし、あとの三日をエステとスポーツジムに通う日々は変わらなかったが、会社はあたしを「ただの広告塔」として扱っていた。

その上、もっと痩せろ、もっと綺麗になれ、もっと食事制限しろ、道を歩けば、あ！ トーヨコミュニティだ写メ取って！

あたしは、そんな日々に疲れきっていた。

vol.41【折れた広告塔 第2話】

（翔君のお店の、お好み焼き食べたい）

一度考えると、舌にこびりついたあの味が蘇ってきた。

（飲み物、ビールじゃなくて、ウーロン茶頼めばいいわよね）

（マヨネーズとタレは控えめにして、

青のりバンバンかければカロリーも少なくて済むし）

（豚肉は食べないようにしよう。

具はイカだけ、イカだけイカだけイカだけ……）

（ああっ！一回だけなら、一回だけなら……）

気がついたら携帯のメモリーの中に入れておいた
翔君のお店に電話をかけていた。

「はい、お好み焼きのしょ……」

「翔君久しぶりあたしみうなお好み焼き食べたい！」

「みうなちゃん？ スゲー！」

『トヨコミューナ』から電話がかかって来た」

「その呼び方やめてよー！ 読んだでしょ？」

あたしのインタビュー。ただのギャグでしょ、ったく！」

「みうなちゃん、いいの？ そんなところで大声出しちゃっ……」

「あたし気に入らないの『トヨコミューナ』って呼ばれるの！
とにかくお好み焼き食べたい！ 今他にお客さんいる？」

「ああ、さつきオタクが一人来たけど、もう帰ったよ。
今日は平日だし、この時間からはほとんど客来ないから、
そろそろ店じまいしよかなって思ってたところ」

「ゴメンね、五分でいく五分でいく！」

「お好み焼きだけ食べて三十分で帰るから！」

「いいよ、そんなに氣い使わなくても。」

「みうなちゃんのためにお店開けて待ってまゝす」

電話を切った後、あたしは翔君のお店に直行した。
お好み焼き、お好み焼き……。

vol.42【折れた広告塔 第3話】

ガラッ！

「ビール！」

「あー、生中でいいよね？」

「具はねえ、ある奴全部入れて！」

「わかった。えーと、豚肉にイカに海老にホタテに揚げ玉に

コーンにネギ……ツナも入れるとおいしいよ」

「じゃあお願い！ あー、けっこう時間かかるねえ、レアでいいレアで！」

「ダーメ、焼肉はレアでもいいけど、お好み焼きはウェルダンで！」

さっきの「自主規制」はどこへやら。

ウーロン茶はビールになり、イカだけだったはずの具は

全種類になり、出てきたお好み焼きに、

マヨネーズとタレと青のりをふんだんにかけ、

何回も何回もおかわりし、三十分で帰る予定が一時間を過ぎてしまった。

「あゝあ、食った食った。うわ、スゲー腹。臨月だよこりゃ」

「みうなちゃん、急なダイエットは良くないよ。」

明日その腹でマルキュー行くの？」

「明日は実質的に休みの日。ジム行ってくるだけ」

「今のみうなちゃん、一週間に一度も休みがないのと同じでしょ？」

「ホントだよまったく。エステやスポーツジム

なんか行かなくても痩せるっての。あ、麻巳子元氣？

「こういう生活していると麻巳子と遊ぶ暇もなくてさ……」

「麻巳子とは、別れた」

「え？」

「最悪だよ、あいつ。ウチのミワをエステに勧誘していやがった」

「はあ？ あのポスターのミワさんを？」

「エステに行ったって治すところないじゃん！」

「だよな、そんなこともわかんないのかね？」

「あゝあ、麻巳子、もっと頭のいい女だと思ってたのにな」

vol.43【折れた広告塔 第4話】

麻巳子は、翔君と付き合いはじめた頃から

「RITTER」のライブにちよくちよく通うようになり、唯一の女性メンバーのミワと親しくなったらしい。

翔君を含む他のメンバーは、麻巳子とミワは

普通に仲がよいと思っていた。

しかし「RITTER」が主催するライブイベントで、ギャルバンばかりを集めて対バンしたときに事件は起こった。

「麻巳子ってホント空気読めねえ。そのライブ終わった後さ、あいつ打ち上げについて来たんだよ。

まああいつは、何回も『RITTER』観に来てくれてるし、彼女だしと思って、別にいいかと思って参加させたのが悪かった」

麻巳子は、その場にいた女全員に

「三時間たっぷりエステの初期体験ができる」という触れ込みの五千円のチケットを、まるで札束のように頭上に掲げてペラペラとやり、全員に酒が入っていることをいいことに

「買って買って」と居酒屋で騒ぎまくったという。

「そしたら、ミワがキレちゃってさ。

いきなり立ち上がって『テメエ、ウゼーんだよ!』って、

麻巳子をボコッたんだ」

麻巳子は、ミワと親しくなったわけでもなんでもなく、ただ、エステの勧誘をしていただけ。

ミワは、ライブに来るたびに勧誘の話しかない
麻巳子に痺れを切らしていたという。

「そしたら麻巳子、その場にいた女全員に『ざけんな！』
って言われてボコボコにされて居酒屋追い出された。
ギャルバンばかりだったけど、バンドやってる女なんて、
酒一杯飲んだらすぐ凶暴になるし。俺も言っちゃったよ」

「なんて？」

「『この居酒屋はもう一つの家みたいなもんだし、
対バン of 奴らも“戦友”だしな。どっちもおまえより付き合い長い
の！』

そういう大切な仲間を、勝手に飯の種にすんなバカヤロめ』
で、一発ボコってズイ・END」

「はーん」

あたしは麻巳子の行動に呆れ返っていた。
麻巳子とは、確かに付き合い長いけど、
翔君の言っていることのほうが正しい。

あたしが「GET CUTIE」の広告塔になっただににもかかわらず、
麻巳子からは電話やメールで

「みうなの知り合いのモデルで誰かいらない？」

と、しつこく連絡がきていた。もちろん無視していた。
ミワさんといい、今のあたしといい、
相手を考えずによくそんな図々しいマネができるもんだ。

vol.44【折れた広告塔 第5話】

「麻巳子はさ、中学からのマブだけど、エステで働き始めたとたんに変わっちゃったね。外見だけは綺麗になっただけ、

ただの五千円チケットの売り子マシーンになっちゃった」

「みうなちゃん大丈夫？」

ああいう奴らが勧誘してるエステの広告塔なんかやってて」

「そうなのよー。それが唯一の心配。宇崎さんも頭いいと思うけど、なんか手短で済ましてるよね。『GET CUTIE』なんかじゃなくて、

もっと大手のエステ紹介しろっての」

「なんかきな臭いよな」

「まあ、大手のエステも、会社のカラーはさほど変わらないって麻巳子に聞いたけど……」

「そうなの？ ちゃんと宇崎に相談した方がいいよ。

みうなちゃんそれだけ綺麗になっただし、

ジムにも通ってるんでしょ？ 『エステはもういいです』とか言えないの？」

「それ、あたし言える立場じゃないから。まあ、相談はしてみるけど」

「みうなちゃん」

「なに？」

「麻巳子と変わらないね。トーヨコミュニナさん」

「翔君までそんなこと言うんだ……もう帰る。おあいそして」

「タダでいいよ」

「え！　これだけ呑んで食べたのに……」

「タダでいい。その代わり、

この店には二度と来ないでくれる？　トーヨコミュニナさん」

トーヨコミュニナさん。

翔君まであたしをそんな風に見ていたとは。
帰るしかなかった。それでもあたしは、

「客からは、ちゃんと金を受け取りな！」

と捨てゼリフを吐いて、財布に入っていた
全ての「札」をカウンターに置いて来てやった。

女には嘲笑され、男には「オカズ」にされるのが今のあたし。

もうイヤだ。

vol.45【腐った果実 第1話】

それからずっと「DIY」は、マルキユー店だけではなく、全ての店舗で売り上げが低迷した。

淡々とスケジュールをこなすだけ

ストレスだらけの毎日に疲れ果てたあたしは、

週四回のマルキユーでの仕事は休まずに出勤したが、
エステもスポーツジムも行ったフリをしてサボっていた。

各店舗では「販売員のリストラ」が行われ、

マルキユー店も例外なく「リストラ」の嵐を受け、

愛店長と「広告塔」のあたし以外の販売員、

あゆみとカンナのうち

「月間売り上げを下回った方」がクビを切られた。

もちろん、クビになったのは、

真面目なあゆみ販売員ではなく、

さんざん人の売り上げを横からかすめ取っていたカンナ。

いい気味だ。

「広告塔」のあたしをさんざんバカにした会社が悪い。

「高木みうな」を「ミューナ」にした宇崎が悪い。

あたしの心は腐りきっていた。

vol.46【腐った果実 第2話】

そんなある日、マルキュー閉店後、
真面目なあゆみ販売員が事件を起こした。

「あゆみ、空のダンボールがバックヤードに
たまっちゃったから、捨ててきてくれない？」

「店長、そんな仕事ミューナにやらせときゃ
いいじゃないですかー！」

「あたしはミューナじゃなくてあゆみに頼んでるの」

「わかりましたよ。けっ！ 元巨デブのクセに……」

「今なんて言った？ あゆみ販売員さん」

「も・と・きよ・で・ぶ・の・く・せ・に、
って言ったんだよ、トップモデルのトーヨミューナ様。
聞こえなかったかしらあ！」

ガシャン！

あゆみは、がっちり固定されている『レパブリカ』の
ディスプレイを力任せにひっくり返した。

床一面に派手な色使いの下着が撒き散らされ、
商品を置いてあった鉄パイプの棚が壊れた。

「あゆみ！ あんた、今自分がなにやったかわかる？
店の商品を壊すなんて……ふざけたことやってんじゃ」

「ふざけてるのはどっちだよ！

あんなもんウチの商品じゃねえ！ オマエモナ！」

あゆみはあたしに飛びかかると、顔面をグーで殴った。
あたしもあゆみの顔面をグーで殴りかえした。

店内が修羅場と化した。

「ミューナ？ あゆみ？ やめ……やめなさい！
あゆみ！ ミューナの顔を殴るのだけはやめなさい！」
「うるせえよ！」

愛店長が叫ぶのも聞かずに、あたしとあゆみは互いに
悪口を浴びせながら殴り合いの激しいケンカをした。

「テメエみてえな奴には、
あたしらの気持ちなんてわかんねーんだよ！」

「ちょっとはわかるよこの高校中退！」

「あんだとお！」

「どーせ、あんたもカンナも
“店に所属しないで桃売ってた”んだろ！」

「どついつ意味だよ！」

vol.47【腐った果実 第3話】

「ホントバカだな！ ストレートに言っただけだよ」
『エンコー』「やっただけだろ？」

「『エンコー』って何時代の言葉だよ！
そういうのはなあ『ウリ』ってんだよ！」

「あーそうかい『ウリ』やっただけで高校中退の女どもが
よくモデルになれたなあ！」

「うっせー！ どうせあたしらは二流だよ！
テメエこそバージンのくせしやがって！」

「あたしは自分の体大切にしているだけ！」

「デブでブスだったからモテなかっただけだろ！
そんな奴がよくここの販売員になれたもんだよ！」

「販売ならテメエらにはかなわねーよ！
あんたら高校中退して『ウリ』やり始めた時点で
『プロ』になっただけだからさ！」

「はあ？ 正しい日本語話せこのデブ！」

「パニくるなこの雌猫！ キャリアが違っただけだよ。
テメエら『販売』しかしたことねえし、それしかできねえしな！」

「ざけんなあーーーーー！！！」

バリイイイッ！

ポタ……ポタツ、ポタツポタポタ……。

「うつうつ」

「あっ……」

「イタツ、イタイ！ イタイイタイイタイ！
うぎゃあああああああ！」

「あゆみ！ あんたなんてことを……」

ゴロンゴロンゴロン。

「うげっ！ 血が、顔から血があああああ！」

「でい、DIYさん？ 救急車呼びましょうか？」

「お願いします……」

vol.48【腐った果実 第4話】

口は災いの元って言うけど、本当だ。

あゆみになにを言われても、シカトすればこうはならなかった。

あゆみが、長い付け爪であたしの顔をおもいつきり引っ掻いたのだ。

そのとたん、顔面から哺乳類のような大量の血がダラダラと溢れてくるのがわかった。

激しい痛みを感じたのはその後。あたしはその場にバツタリ倒れ、バタバタと転げ周り、マルキューの床を血で染めた。

放心状態のあゆみと愛店長。見かねた他店のスタッフに救急車を呼んでもらい、あたしは病院に運ばれた。

幸い、目に傷はなく、怪我也全治一週間ですんだが、顔の傷が完全に消えるまで、そのまま強制入院させられた。

その間『レパブリカ』だけではなく『DIY』のディスプレイを壊したうえ、洋服などほとんどの商品をも壊し、さらに「広告塔」であるあたしの顔まで壊した、全責任をあゆみ一人が背負うことになり、その日のうちにあゆみは解雇された。

また、止めに入らなかった（入れなかった）愛店長も
二週間の謹慎処分を喰らい、販売員が一人もいなくなった
「DIY！ 渋谷09店」は、二週間の臨時休業をするはめになっ
た。

その二週間の間、会社側は“二流”モデルの仕事を
こなしながら就職活動をしていたカンナを、
人手不足のため会社に呼び戻すことを決めたという。

vol.49【満たされない女達 第1話】

二週間後、顔が元に戻り、愛店長の謹慎処分も終わり
「DIY！ 渋谷09店」は通常営業を開始した。

カンナは、しつかり戻ってきていた。

しかし、開店から閉店までの間、

カンナはあたしと一言も口を聞いてくれなかった。

閉店後、三人の間で緊急ミーティングが行われた。

「カンナ」

「……」

「カンナ、今日のアンドの態度はなに？」

お客様にもミューナにもあたしにも、あんな態度取って。

今日の売り上げ、半分も達成できなかったじゃないの……」

「愛さんよお、売り上げ売り上げってうるせーんだよ！」

「カンナ！」

「確かに会社からお呼びがかかって、

呼び戻してもらったことには感謝してる。

でも、商品やディスプレイを壊したのは

あゆみだけじゃないじゃん。ねえ？ ミューナ」

「そりゃそうだけど…… あゆみはあたしの顔にも傷をつけたのよ」

「だったら、傷がついた時点で辞めりゃよかったのに。」

今のミューナはただ、会社と宇崎のジジイに面白がられて担がれてるだけじゃん」

「カンナ、あんた……」

「うつさい！　いくら専属モデルだからって、ミューナも商品やディスプレイを壊した。なのに、なんであゆみだけが全責任を取って辞めなければいけないワケ？」

あいつ今、カネも仕事もなくて、AVの面接受けまくってんだよ！あんな真面目な奴がかわいそうに！

あんたもモデル辞めるべきだし、
それだけ有名になって綺麗になっただからAVでもやれば？」

「カンナ！　あんたあたしがバージンだって知っててそんなこと……」

「うつせえ！　だいたいねえ、この会社の対応にもむかつくんだよ！」

一度辞めさせといて、すぐまた戻って来いなんていい加減すぎるよ。あたしが感謝してるのは会社じゃなくてカネ！
つたく、総務部上がりの女が……」

「総務部上がりの女がなんだって？」

「榊部長」

いつの間にか、あたしたち三人が車座になって話しこんでいるところへ、えみり部長がやってきていた。

vol.50【満たされない女達 第2話】

「さつき上から言われた。」

マルキュー巡回してこいって。相当腐ってるわね、カンナ」

「ババアに言われたくない！」

「えみり部長をババアと呼ぶのはやめて！」

「榊部長をババアというのなら、今すぐ辞めなさい！」

愛店長と微妙にハモってしまった。

先のがあたしで、後が愛店長だ。

「あたしをババア呼ばわりするのは、

あんたみたいな金髪のクソガキには十年早い！」

「……。」

「十年早い」って死語だけど、えみり部長の

迫力に誰も口を聞けなくなってしまった。

愛店長が、カンナの手を握り、優しく諭すように言った。

「カンナ、榊部長の『伝説』もちろん知ってるわよね」

「はい」

「えええ、えみり部長の『伝説』ってなんですか？」

「榊部長、総務部で『伝説』について、

ミューナに話したことないんですか？」

「ないわ」

「あ、あたし、てっきりミューナは『伝説』

知ってるんじゃない……榊部長、ミューナには

教育してませんでした。すみませんでした！」

愛店長がえみり部長に平謝りしている。相当な『伝説』のようだ。

「愛。どうやら、あたしの口から直接ミューナに

『伝説』話した方がいいみたいね。まあ、総務部の社員に、
今まで誰にもそのことを言わなかったのは、

過去の栄光だけで生きてる、

つまらないババアって思われなくなっただけよ」

えみり部長が、静かだが迫力のある声で話し始めた。

部長が『DIY』に入社したのは、二十二歳のとき。

つまり、四年制大学を卒業して販売員になったってこと。

えみり部長が輝けるのは三年間だけだった、はずだった。

「今ほど酷くないけど、あたしが就職活動してた頃も氷河期でさ。

私立文系美大卒の二十二歳のあたしは、

ショップ店員になるのも厳しかった。

あの頃女が内定をもらえる業界っていったら、

生保の営業とか、先物取引とか、パチンコ屋とか居酒屋とか。

そんなのだけ」

えみり部長は苦労人だ。大学受験そのものを親に反対されたが、

どうしてもファッション関係の仕事に就きたくて、

親の反対を押し切って東京の美大に合格。

名古屋出身のえみり部長は「女は高校を卒業したら結婚」と、うるさい親を完全に無視して、家出同然で東京にやってきて、四年間親戚の家に居候した。

大学生の頃、生活費、学費、その他もろもろの経費すべてを、水商売をして稼いでいた。

vol.51【満たされない女達 第3話】

美大といえば、通うだけでお金がかかると言われている。

デザインの授業を受けるために必要な、型紙や、布、糸、電動ミシン、パソコンなどの「その他もろもろの経費」は全て自腹。家賃は居候していたから一円も払う必要はなかったが、給料は入っては出て、入っては出ての繰り返し。水商売や、新聞配達など、高い給料のバイトをしないと学食の三百五十円のカレーすらも食べられない。周りもそういうバイトをして、そついう生活をしている子ばかりだったという。

「さすがに、四年間親戚に置いてもらうのに『水商売やってるとは言えなかったから

『ファーストフードで夜、店中の掃除するバイトしてる』ってごまかしてた。

両親にも、親戚にも『そんなバイトがあるんだね』って珍しがられたし、褒められたよ。

昼食はねえ、親戚のおばさんが毎日おにぎり握ってくれた。学食のカレーなんかより、ずっと安上がりだし、美味しかったよ、すこく」

そこまで努力しても、氷河期は厳しかった。

アパレル関係の会社を受けまくり、

デザイナーとして就職したかったが、どこも狭き門。

おまけに、時代背景として美大卒の「田舎者」より、

東京近郊に実家がある服飾専門学校卒の

「お嬢様」がもてはやされていた。

「ガチガチのリクルートスーツ着ていくより、全身原色着て、髪の毛真っ赤に染めてるアンポンタンの方がチヤホヤされる時代だったの」

えみり部長はデザイナーを夢見ながら、ショップ店員の面接も受けていたが、それでもダメだった。

短大卒、専門学校卒、高卒の、ルックスの良い若い女の子を受け入れている企業ばかり。四大卒の女は、相手にもされなかった。

「一社も内定もらえなくて、ストレス溜まりきってて、もうヤケクソで

『私は名古屋出身の田舎者です。

本当はデザイナーになりたいのですが、

どこにも内定が出ません。販売員志望でも

履歴書を送っていますが、書類審査で落とされます』

つてはつきり言ったの。

その時、たまたま黒のリクルートスーツ着てて、面接官に

『君は黒が似合うね。三年しか働けないけど、いい？』

つて言われて内定もらった。それが、まだ小さい頃の『DIY』」

「え……」

「『自分はこれだけ努力してきたすごい人』ってことを

延々アピールするより、ありのままの自分自身を曝け出したのが、かえって良かったみたい。

『三年しか働けないけど、いい？』なんて、人間が言う言葉じゃないよね。

そいつはすでに、リストラされてる。

でもね、その言葉にすがりつかなきゃ生きていけないほど、内定欲しかったし、それだけ氷河期って厳しかったの。

さっきのカンナじゃないけど、

美大の友達で一個も内定ももらえなくて、

仕方なくそういう世界に走った子なんて、何人も見てるわ」

vol.52【満たされない女達 第4話】

入社してからというものの、えみり部長は販売員として毎日毎日、超人的な売上目標を達成していたという。

そんなえみり部長を、二十五の誕生日が来ただけで、自動的に総務部に回すか、退職するか迫るほど『DIY』も馬鹿な会社ではない。

えみり部長は、肩書きこそ

総務部の末端社員だったが、実質的には商品制作部で仕事をし、毎日夜も寝ないで商品をつくっていたという。

えみり部長のつくった洋服は、店に並べたとたん、飛ぶように売れた。

127

「DIY」の礎は、全部えみり部長が創ったと言っても過言ではない。二十代後半にして、えみり部長は総務部部長の肩書きを会社から受けることとなる。

「ミューナ、あたしたちに総務部から抜け出してたことあるでしょ？

商品制作部や開発部で指揮を取ったり、

各店舗を巡回したりしてたの。洋服なんて流行り廃りがあるから、今ではあたしなんかより、若い子がつくった洋服の方が売れる時代になったけどね。

制作部で指揮を取ることはほとんどなくなっただけど、

巡回はまだやってる。これがあたしの伝説。

社内じゃこんなのが『伝説伝説』って騒がれてるけど、そこら辺に転がってるよくある話の一つよ」

はじめて聞いたえみり部長の伝説。本人の口から出ると、愛店長も、カンナも、あたしも口もきけないし動けない。

「カンナ、ミューナの言葉を借りれば

“ 店に所属しないで桃売ってた ”

体だけは一人前の大人のおんたが、

なに子供じみたこと言ってるの？

おんたには販売しかないんでしょ？

好きなことをして飯が食える。

それがどんなに幸せなことか、感謝しなさい」

「す……」

カンナが唇を震わせた。

「すす、スミマセンでした！ 皆さん本当にスミマセンでした！」

カンナは泣いていた。えみり部長はカンナを抱きしめた。

「泣きな泣きな、どんどん泣きな。偉そうなことばっか

喋っちゃってゴメン。いい？ カンナは『できる子』だから、会社だっておんたのこと呼び戻したんだよ」

「あたし、この三人の中で売り上げダントツのビリなのに……」

「自分を責めちゃダメ。あたしだって、この会社から

さんざん冷や飯食わされたよ。入社したての頃や

『総務部に行くべき女が制作室にのさばってる』とか言われて虐められてた頃は、毎日ボロアパートで泣いてたからさ。

それでも、働いてカネ稼がなきゃ生きていけないじゃん。泣いてい

いんだよ」

「はい」

「それからカンナ、あゆみとはもう縁を切るんだよ」

「えっ？ あゆみは小学校からのダチです！

縁を切るなんてできません！」

「まあね。あんたには辛いことかもしれないけど、

あたしも学生時代水商売やってたから、

そういう業界に走っちゃう子の気持ち、少しはわかるよ。

でも「水商売」と「フーズク」って全くの別モノだからね？

自己責任で会社クビになったくせに、

いつまでも会社のせいにして、変な面接受けてる

あゆみみたいな奴とか、なんの勉強も努力もしないくせに、
将来の目標がない、することがないって自分自身に嘘ついて、
ビデオやっていっぱいカネ貰って服買つて、

さっさと結婚しよう。なんていうギャルちゃん達の
思考回路まではわからないし、わかりたくもない。

あゆみは、もう別世界に生きてる人間だと思いな。

ズルズル付き合い続けてると、

あんたまでそういう世界に引きずられちゃうよ。イヤでしょ？」

「はい……」

「九〇年代にある少女漫画家がいてね。

その人のアシスタントやってた人、

今じゃ全員漫画家としてデビューしてるんだけどさ。

その漫画家の八歳年下のマブダチが、いいこと言ってるんだ。

『わからない若者文化は全てシカト、それが大人のエレガンスっす

『』

って、八歳年上の女に説教タレてんの。はっは」

「わからない若者文化は全てシカト……すごい言葉ですね」

「ね、すごいでしょ？ その八歳年下のマブダチって一般人で、肩書きが『図書館アルバイト兼マンガ読みまくり女』だからね」

「
プ
ハ
ハ
」

カンナが泣きながら笑った。

「あははははははははははははははは！」

あたしもカンナも、愛店長もえみり部長も、声をあげて大笑いした。さすがえみり部長。「雨降つて地固まる」とはこのことだよ。

vol.53【満たされない女達 第5話】

「じゃあ、あたしはまだ仕事残ってるから、中目黒戻るね。バイバーイ」

えみり部長は、そう言い残しマルキューを去ろうとした。

部長は、あたしではなく、カンナを励ますために「伝説」を喋ったようにしか思えなかった。

えみり部長はずっとあたしを無視していた。

本当に腐っているのはカンナじゃなくてあたし。

広告塔であるあたしが自ら会社の売り上げを下げたんだから。

とにかく謝りたかった。あたしは立ち上がって後を追った。

えみり部長は、社員用のエレベーターの前に立っていた。話しかけようとしたその時、なにやらおかしい仕草をした。

後ろ姿なのではつきりとはわからないが、

黒いバッグの中から、手のひらサイズの小さなビニール袋が縦にミシン目でつながっている長い物体を取り出し、一番上を切った。

中に入っているのはなにかの薬だった。

白、青、オレンジ……。

その薬を、えみり部長は水を使わずに一気に飲みこんでいるようだ

った。

「部長!？」

「ゲフツウ、ゲボ、ゲホツ！」

話しかけると、えみり部長は激しくムセながら、露骨に驚いてこっちを振り向いた。

「なに？ 驚かさないでよ」

「や、驚かすつもりは……部長、それなんのクス」

「なーに言ってるのよ、胃薬！ ったく、

シヤレにならないことが立て続けに起きたから、神経性胃炎になっちゃったわよ！」

「神経性胃炎って……大丈夫ですか？」

「神経性胃炎とは、昔からの友達。うまく付き合ってるわよ、ハッハ」

「ははははは」

いつもと変わらない豪快な笑い声に、つられて笑ってしまった。えみり部長は、エレベーターに乗って去っていきこうとした。

ポトン。

「あ」

部長は、薬を一回分、エレベーターの前に落としたのに
気づかずに行ってしまった。

ワザと落としたようには見えない。あの人はそんなことはしない。

気になってその小さな袋を拾った。

そこに印刷されていた文字に、再びあたしは固まった。

【榊えみり様 抗うつ剤 夕食後一回分】

Vol. 54【代表取締役 宇崎洋平 第1話】

えみり部長を追いつめてしまったのは、あたしだ。

あたしは心を入れ替えて、週四回の勤務だけではなく、ジムにも再び通うようになった。

「トヨコミュニナ」に

テレビや雑誌の取材が入れば、真面目に答えた。

二十五の誕生日が間近に迫っていた。

その間に会社全体の売り上げは徐々に持ち直し、

あたしを「トヨコミュニナ」と呼ぶ人間はいなくなり

「お好み焼き 狸々」にも入店を許された。

ただ、あれから二年経ってもあたしを許してくれない人間が四人いる。

えみり部長、麻巳子、翔君、そして宇崎。

部長はマルキューに巡回しても、

愛店長とカンナだけに話しかけ、あたしのことは無視。

麻巳子とは音信不通。こっちから電話やメールをしても、返事が返ってこない。さすがに怪しいので、

ジムにだけ真面目に通い、エステ通いは勝手にやめていた。

翔君は「RIITTER」で見事にメジャーデビューを果たし

「お好み焼き 狸々」の全ての権利を、たまたま客として来た

「大企業にリストラされた、お好み焼き大好き酔っ払いおじさん」に譲ったそうだ。

店のオーナーが代わる頃には「RITTER」はすでにレコード会社と契約し、デビューを目前に控えていた。

翔君が「お好み焼き 狸々」を経営していたのは、全てバンドの維持費のためだという。

その話は「RITTER」がゲストとして出演した、某トーク番組で、翔君の口から聞いた。

それ以来「お好み焼き 狸々」には全く行っていない。

宇崎に至っては「ミューナ」のプロデュースを

他の人間に任せっきりになっている上

「本店」ばかりを守っていて、以前のようなペースで商品を搬入しなくなった。

あたしにムリヤリシンデレラの靴を履かせ、綺麗にしてくれたのは宇崎なのに。

生まれてはじめて周囲からチャホヤされたことによって、すっかり調子に乗ってしまったあたしは、宇崎への恩を忘れていた。

プロの「モデル」でもなく、プロの「ショップ店員」でもない、ただの自己嫌悪の固まりと化した

二十四のあたしは、未だにバージン。

会社の上層部からも

「一応『DIY』専属ってことにしておくけど、勝手にいろんな媒体に出ていいよ」と言われ、給料を半分以下に減らされた。

腹いせに、いろんなファッション誌やモデル事務所に、アパートに大量にある宣材写真を送ったら、面白いほど大量のオファーが来た。

モデルとしてのギャラも専属の頃と比べてケタ違いに増えた。

一流ファッション雑誌の撮影で有名モデルとたくさん知り合い、男モデルや女モデルの知り合いが増え、旅行や合コンも何回もしたが、はじめての男は宇崎しか考えられない。

なぜなら、ショップ店員になってから「特別な商品」を求めてやってくる客に

こういう態度を取らなければいけないのに、毎回歯がゆい思いをしていたからだ。

「あのう……こういうデザインで

『サニタリーショーツ』は、さすがにないですよねえ?」

マルキューにおいては、レパブリカのコーナーは

もはや畳一畳程度。サニタリーショーツも置きたいが、いかんせんスペースがないし、商品そのものが入ってこない。

「申し訳ございません。当店では扱っていないのですが

本店に行けばございます。『レパブリカ』の

サニタリーショーツ、試作品使ってますけど、すごく機能的ですよ」

そう営業トークして本店の地図が書いてある

フライヤーを差し出すと、客は必ずこう言う。

「めんどくさ、こんなところにあるんだあ……」

「ま、まあ、同じ渋谷ですし。」

ここから歩いて五分くらいですから」

「この界限にあるお店は、ちょっとね。」

マルキューの中でサニタリーショーツ売ってる店ないかしら?」

マルキューに来るお客さんは、入っている店は

全部「系列店」に見えるのであろう。

そういう時、あたしはマルキューに入っている
「ライバル」の下着専門店の名前を出すしかなかった。

はじめて宇崎に会った日、プレゼントとして貰った
ベージュのサタリーショーツを、
あたしは月のものが来るたびに愛用していた。

あのときの宇崎は「それは試作品」だと言っていたが、
これだけ使い勝手がいいサタリーショーツは他にない。
商品の性質上前面に押し出して売るものではないけれど、
ここでも売ればいいのに。

二十五の誕生日を迎えたら、あたしは迷わず
「DIY」を辞めようと思っていた。
会社もあたしの辞表を素直に受け取るだろう。

「ミューナ」にはもう何の価値もないし
「トーヨコミュニティ」もすでに飽きられている。

この間の合コンで知り合った某有名男性誌のモデルから、
熱烈なラブコールを受けた。

そのモデルとは、好きでもないのに何回かデートした。

好きでもないのに何回もキスをした。

ただ、最後の一線だけは越えられなかった。
素直に「私はバージン」だと打ち明けると、

そのモデルは笑顔でこう言った。

「ミューナが『DIY』を辞めて、モデルも辞めたら、結婚しよう」

Vol. 56【代表取締役 宇崎洋平 第3話】

好きでもない男との「寿退社」を目前に控えていたあたしは、ある早朝、携帯電話でたたき起こされた。

宇崎だ。かなり緊迫した声だ。

「ミューナ！ 今すぐ新聞読め！」

「取ってないですよ、新聞なんか」

「パソコン持ってるか？」

「持ってますけど、何か？」

「だったらヤフーのトップページを今すぐ見ろ！」

ピッ。

（なんなの？ 寝てたのに。

久しぶりに連絡来たと思ったら慌てやがって……）

モデルのギャラと給料を貯めて買った

最新型のノートパソコン。

もちろん二十四時間電源入れっぱなし。

出勤する前も、毎日テレビの代わりにヤフーの

トップページだけはチェックしている。

いつものように機械的にノートパソコンを開いた。

【東横ミューナ息絶える】

その文字をおそるおそるクリックした。

「DIY」民事再生法適用を申請、負債十二億円
（七月一日二時五〇分配信）

大手アパレルメーカー「DIY」（代表：小澤 喜代彦）は
先月末、東京地裁に民事再生法の適用を申請し、
即日受理されたと発表した。負債総額は約十二億。

二〇〇八年度より「DIY」グループは
「オリジナルランジェリーショップレパブリカ」
（以下「レパブリカ」代表：宇崎洋平氏）と業務提携。

「DIY」総務部末端女性社員を「トヨコミューナ」の愛称で、
自社オリジナルブランドの専属モデルに起用し、
若い女性を中心に話題を集めたが、
今年に入ってから業務が不振に陥った。

素人モデル「トヨコミューナ」は「DIY」と共に、
中堅エステティックサロン「GET CUTE」の広告塔も兼ねて
いた。

先月五日、都が特定商取引法に違反したとして、
「GET CUTE」に三カ月間の業務停止命令を出した。
「GET CUTE」は社員に
「三時間たっぷりエステの初期体験ができる」
という触れ込みのチケット営業だけをさせており、
それが高額なサービスや商品の販売目的であることを明示していな
かった。

「DIY」代表小澤氏と「レパブリカ」代表宇崎氏は、先月七日の時点で「GET CUTE」との契約を解除。集中して再建を図ったが、新規の借り入れや既存債務の借り換えを金融機関に断られ、六月分の手形決済資金が調達できなくなった。

このニュースでわかったこと。

- 1・「DIY」「レパブリカ」が両方とも潰れた。
- 2・「GET CUTE」はやはり怪しい会社だった。
- 3・「トヨコミューナ」の時代はすでに終わっている。

慌ててパソコンをテレビモードに切り替えた。

どこのテレビ局も「DIY倒産」のニュースなんて報道していない。

Vol. 57【代表取締役 宇崎洋平 第4話】

♪ピーポピーポピポピポポポ♪

携帯が鳴った。「寿退社」の相手だ。

「ミューナ、ニュース見たよ」

「あたしも」

「ミューナが『DIY』を辞めて、モデルも辞めたら、結婚するってオレ言ったよね」

「うん」

「ミューナは会社辞めて、モデルも辞めるんだよね？」

「モデルは辞めるけど『DIY』は辞めないよ」

「は？ 会社が潰れたんだから、辞めるしかないじゃん」
「会社つてのは、潰れても給料出なくても、
やんなきゃいけないことが山ほどあるの」

「どういうこと？」

「あたしは『DIY』の一社員として、
最後まで残る。一番悪いのあたしだし」

「自分を責めちゃだめだよミューナ！
そんな面倒くさいことしないで俺とさあ……」

「悪いけど、それはできない」

「どうして？ プロポーズだよこれは」

「だったらなんであたし達電話で話してるの？」

「それは……」

「ごめん。あんたとは結婚できないや。」

あたしが本当に好きなのは、あんたじゃない。いままで、本当にゴメン！」

「ミュー」

ピッ。

すぐに「本当に好きな男」に電話をかけたが、話し中なのか電源を切っているのか、どの連絡先に電話をしても全く繋がらない。

あたしは「総務部 高木みうな」として、久しぶりに中目黒のオフィスに出勤した。
「トーヨコミュニナ」としても。

中目黒のオフィスのビルの前には、なぜか大勢の芸能レポーターが詰め掛けていた。

カシャカシャカシャカシャ！

鼓膜が破れてしまいそうな、けたたましいフラッシュ音を無視して、いつものようにセキュリティカードを出し、

自動改札機のような「会社の入り口」を通った。

目の前の「受付」にあったA4サイズの張り紙にすぐに目が行った。

【社員の皆様へのお知らせ】

本日を持って、以下の社員以外、セキュリティカードを使って入社することが出来なくなりました。

小澤 喜代彦

榊 えみり

高木 みうな

ゲスト

芸能レポーター達は、カヤの外でまだ騒いでいる。

「トーヨコミュニナさん！ コメントを！」

「トーヨコミュニナさん！ これはいったいどういうことですか？」

「皆さん、小澤社長は見かけましたか？」

「見ておりません！ それよりトーヨコミュニナさん……」

「黙れ！」

一喝すると、芸能レポーターは全員シュンとして押し黙ってしまった。

「『DIY』総務部 高木みうなとお話いたします。

今日からこの会社の社員は三人だけになりました」

「どういうことでしょうか？」

「代表取締役は榊えみり。社員は高木みうなと

ゲストの二人だけです。今後この会社について取材する際は、

窓口である私、総務部高木みうなこと『ミューナ』を通してください」

「ふざけやがって！」

一人のレポーターが、セキュリティカードもないのに入り口を強行突破しようとした。

ビイイイイイイイイイ！

「ヒッ！」

そいつは、けたたましいブザー音に驚いて不様に後ろ向きに倒れた。

「皆さんお勤めのテレビ局や出版社にだって、この程度のセキュリティはついていないでしょうか？
大の男がなにビビってるんですか？」

レポーター達はそれ以上あたしに近づこうとはしなかった。

自動ドアのロックの仕方は、入社時にあらかじめ教育されていた。あたしは教えられたとおりに自動ドアをロックし、

受付に貼ってあった紙を「自動ドア」に外に向けて貼ってやった。芸能レポーター達はフラッシュをたいて

その紙をパシャパシャとやっていて、自動ドア越しに、

「ゲストというのは『レパブリカ』の宇崎洋平氏のことですよね？」

と大声で質問してくる奴もいたが、ロックした自動ドアを叩き壊してまで進入してくる奴は一人もいなかった。

あたしは、オフィスビルのどこかにいるはずの
榊えみりとゲストを探しに前に向かって走った。

代表取締役、榊えみりはすぐに見つかった。
総務部のいつものデスクに突っ伏していた。

「部長」

「……。」

「受付に、あの紙を貼ったのはあなたですよね？」

「そうよ」

「どういうことか、部下である私に詳しく説明してください」
「悪いけど、そんな気分じゃないの」

「大丈夫です。オフィスビルの自動ドアはわたくしが
しっかりロックしておきましたし、あの紙も、
芸能レポーター達が競って写真を撮るような、
目立つ位置にしっかりと貼りなおしておきました」
「さすがあたしの部下、いい仕事するわね。電話線は？」

「電話線については存じませんが、インターネットを含め、
外部との連絡手段を全て断ち切ったのも、あなたですよ」
「じゃあ、どうしてあたしのデスクの電話が
さっきからガンガン鳴りまくってるのよ？」

「今証明致します」

「やめて！」

榊えみりを無視し、あたしは、総務部元社員が座っていた

デスクのパソコンの電源を入れ、受話器を持った。

「電話は使えなくなっています。パソコンに至っては電源すら入りませんね」

「このパソコンはちゃんと電源入るんだけど」

「あなたのパソコンを見れば一目でわかります。それ、有線式ではありませんよね」

総務部含め、会社のパソコンは全て社内ネットワークで繋がっていました。

社員のパソコンに電源すら入らないのに、えみり部長のパソコンにだけ電源が入る理由なんて、パソコンをちょっとかじった人間ならすぐにわかる。

えみり部長のパソコンは、私物らしきノート型。

ビジネスには場違いなメタリックグリーンの高級ノートパソコンには、

ケーブルが一本も差し込まれていなかった。

「はあ……広告塔のミューナには全てがお見通しみたいね」
「ええ」

「見てごらんなさいよ、このパソコン。どこのテレビ局も同じこと放送してるわ」

「わざわざパソコンなんか見なくても、私の携帯でも同じこと放送してますよ、どこのテレビ局も」

「じゃあ今から言う情報も、もちろん知ってるわよね」
「はい」

「あたしが宇崎洋平と交際してたこと」

「ずっと前から知ってましたよ」

えみり部長がデスクからサッと顔を上げた。

スッピンだ。真っ青な顔をしている。

こんな顔のえみり部長を見たのははじめて。素で退いた。

長い沈黙。目の前の電話線を本体から引っこ抜き、パソコンの電源を切って、先に重い口を開いたのはえみり部長だった。

「確かに付き合ってたけど、あの男はあたしに惚れて近寄ってきたんじゃないわ」
「でしょうね」

「ミューナ、宇崎があたしに近づいたのは“営業”よ」
「知ってます」

「あたしだって、宇崎が近づいてきた理由なんて、最初からわかってた。

でも、あたしみたいな三十路の欲求不満の女が、四歳年下のあんなイイ男に言い寄られたら……
ついフラフラつと行っちゃうのはわかるでしょ？」
「そついうもんですかね」

「あんたも三十過ぎれば、あたしの気持ちがよくわかるわよ。泣きたいのはこつちよ。営業目的で近づいてきたあんな男にマジで惚れちゃって。
会社がこうなったのに真っ先にトンスラした、宇崎のただのコマだった社長に言われるままに、しなくてもいい苦労ばかり押し付けられて。
さっきまでずっとこの電話で苦情処理とマスコミ対応してたけど、さすがに疲れたわ……あたしはずっと、宇崎に弄ばれていたの」

「弄ばれたって……えみり部長は本気だったんでしょ？」

「フン！ 本気だったわよ。 つははは！」

宇崎が本当に惚れてる女はあんただってこと、
なんで今まで気づかないフリしてたんだろ……

ははっ、あははは！ あはははははは！」

「えみり部長？」

「おかげさまで、今のあたしは精神科のお世話になってるわよ！」

どこまでも社長の言いなりになって、宇崎に至っては結婚まで先走りして考えちゃってさ！

自分で自分を馬鹿と言ってやりたいわ！

あの男に狂って、給料から貢ぎまくって、

「ごほうびはセックスセックスセックス！ 愛のないセックスだけ！」

えみり部長は、完全に壊れていた。

自虐的な言葉を何度も何度も吐きながら、涙と鼻水をドバドバ出して大笑いしている。

「あたし、もう会社辞めるの。とつくに辞表提出した」

「え？」

「男に狂つて精神壊して、クスリ飲まないと眠れないし普通じゃいられなくなっちゃってさ。」

働けなくなっちゃったの。せいぜいお幸せに。

トップモデルのトーヨーコミュニナさん！」

えみり部長は、そのまま総務部を去っていった。

あたしはその場に崩れ落ち、号泣した。

「宇崎の、宇崎の……バカヤロー……！」

ひとしきり泣いた後、最後の力を振り絞って、オフィスのどこかにいるはずの「ゲスト」を探した。もちろん、エレベーターも使えなくなっているし、蛍光灯の明かりすら点かない。

太陽光だけで、総務部のある階から、非常階段を屋上まで駆け上がり「ゲスト」の姿を必死に探した。

屋上に「ゲスト」でなく「部外者」がいた。

「DIY」元社長だ。憔悴しきった顔で、フェンスもない屋上の端っこに佇んでいる。すっかり靴まで両方脱いでいる。

死んでお詫びをするつもりか？ 情けないオッサンだ。

「オッサン」

「なんだね、キミか」

「あんたに『キミ』なんて言われる筋合いはないよ。その背中押してあげましょうか？」

「や、やめたまえ！」

「ウソですよ。元社長にそんなことをしたら、この会社のイメージがもつと悪くなりますしね」

「元社長？ 私はこの会社の社長だ！」

「だったら、そんな下手な猿芝居はやめてくださいよ、社長」

「社長」と呼ばれたオッサンは、
靴を履いてあたしに近づき、泣きながら土下座した。

「すまなかった！ 会社がこうなったのは
私と宇崎君の責任だ。許してくれ高木君！」

ドカツ！

あたしはオッサンの頭をヒールで蹴っ飛ばした。

「なにをする！」

「この会社の社長は、今日からわたくし、高木みうなです。
あなたは部外者ですので、屋上からではなく、
一階非常口から速やかに出て行くように！」

Vol. 61【代表取締役 高木みうな 第3話】

「わかりましたよ、高木社長」

「元社長、二つ聞きたいことがあります」

「なんだね？」

「榊えみりは、ここに来ましたか？」

「来ていない」

「でしょうね。あの人は『死んでお詫び』
するようなタマではありませんから」

「あと一つはなんだね？」

「『ゲスト』はこのビルのどこにいるんでしょう？」

「宇崎君かね？」

「いいえ『ゲスト』です」

「そんなあいまいな言い方では、ここの社長は勤まらんよ」
「教えてください、元社長」

「このビルのどこかにいる。高木君。

キミが社長なら全ての階の全ての部屋を探したまえ」

「わかりました。その前にあなたを、

安全な場所に移動させる任務があります。この会社の社長として」

あたしは「元社長」をおんぶして、一階の非常口まで連れて行った。
元社長は非常口の手前で気の抜けたように座り込んだまま。

そつと外を覗くと、しつこい芸能レポーター達が大量に先回りしていた。

すぐに「元社長」から離れた場所に移動し、携帯から一一九番した。

「火事ですか？ 救急ですか？」
「救急です」

「住所をお願いいたします」
「中目黒の『DIY』一階非常口内側です」

「患者の名前と状態は？」
「オザワキヨヒコという名前の、重度の患者がおります。
放心状態で、自力では立つことすら出来ない状態です」

「あなたのお名前と、連絡先を」
「タカギミウナです。患者を無事保護したら、
すぐにこちらまでご連絡を。 090—」

すぐにサイレンの音が近づいてきて、携帯に
「患者を無事保護しました」という連絡が入った。
「社長 高木みうな」に残された仕事はあと一つ。
このオフィスビルのどこかにいる「ゲスト」を探すことだ。

vol.62【代表取締役 高木みうな 第4話】

「ゲスト」は七階の撮影スタジオか、商品制作部か、商品開発部のフロアにいる可能性が高いが、

元社長の言うとおり、あたしはオフィスの全ての部屋を、一階から屋上に向かって探した。

一階のショップ、二階のカフェ、人っ子一人いない。

おそらく、渋谷09店を含む、全ての店舗はとくに閉鎖され、愛店長も、カンナも、会社を去ったであろう。

涙などさつき全て流しつくした。

あたしは「代表取締役 高木みうな」だ。泣く暇などない。

「元社長」の言うことはあながち間違いではなかった。

あたしは、七階の撮影スタジオや、商品制作部、商品開発部のフロアに立ち寄るまでもなく、すぐに「ゲスト」を見つけた。

「ゲスト」は総務部にいた。

元総務部部長のデスクに「ゲスト」が座っていた。

「ゲスト」は電話線を本体に差し込み、パソコンの電源を入れ、画面を見ながら受話器に向かって必死に喚いていた。

「ゲスト」もかなり危うい状態だが、救急車を呼ぶほどではない。

あたしは「ゲスト」をおんぶして、一階非常口まで連れていった。外にはもう、芸能レポーターの姿はない。タクシーを拾った。

「どこまで？」

「日吉まで」

幸い、一階非常口のドアは、鍵を閉めなくても勝手に閉まる。

「DIY」表口自動ドアの前には、大勢の芸能レポーターと、元社員が大勢集まってドアを叩きながら騒いでいたが
「代表取締役 高木みうな」としての仕事は終わった。

もちろん「ゲスト」のデスクの電話線を抜き、パソコンの電源も切っておいた。

本体は後日持ち主が、勝手に取りに来るだろう。

あとは「ゲスト」を日吉のアパートまで連れて行き、食べる物を食べさせて、気の済むまで休ませ健康状態が良好になるまで保護し「ミューナ」として最後の仕事をただでいい。

「ミューナ」も、二人の男をおんぶしたり、オフィス中を駆け巡ったりして、肉体的にも精神的にも疲れきっていた。

小澤喜代彦や榊えみりのような状態になる前に、ミューナも自宅で栄養と睡眠をたっぷり取った。

Vol. 63 【職業に貴賤なし 第1話】

数日後。

たつぷりと休憩を取った宇崎洋平とあたしは回復。

二人で、さんざん近所迷惑になりそうな大声で罵りあった。
宇崎は、口げんかに疲れたのか、突然ワケのわからないことを口走った。

「今すぐお前を『お好み焼き 狸々』に連れて行ってやる！」
「どついう意味だよ！ まだ朝の五時だろ？ 開店してねーよ！」
「お前と口げんかするだけムダだ！ 行けば一目でわかる！」

日吉から渋谷に向かうタクシーの中で、
あたし達は一言も口をきかなかった。

タクシーがモヤイの前に着いた。
店にはタクシーで行けないことぐらい知っている。

あたしは店まで歩いた。宇崎としゃべるのがイヤだった。

ちょうど、朝六時きっかりに「お好み焼き 狸々」の前に着いた。
店構えは相変わらずだったが、雰囲気が微妙に変わっている。

赤提灯が無くなっていた。

外装は、ペンキを塗り替えたのか、清潔なオフホワイトに。

漂ってくる匂いが微妙に違う。

「入れ」

「暖簾が出てません」

「いいから！」

宇崎は店の引き戸をガラッと開けると、
あたしの背中を力任せに押した。

「わっ！」

いきなり背中を押されたのと、
店内で掃除をしていた若い女の店員に
正面からぶつかってしまったのとで、
思わず悲鳴を上げてしまった。

「す、すみません！」

あたしと店員は同時に謝った。

「お怪我はありませんか？」

「いや、そちらこそ……あれ？」

その店員の顔は、どこかで見たようなことがある顔だったし、
声も聞いたことがあるような感じだが、誰かは思い出せない。

店の奥からもう一人の女店員が出てきた。

ぶつかった店員と似たような顔をしていたが、
やはりどこかで見たことがある顔。でも、思い出せない。

vol.64【職業に貴賤なし 第2話】

二人の若い店員は黙々と「開店準備」をしていた。

「悪かったな、ミューナ」

「ミューナ？」

二人の店員がその言葉に即座に反応して、
あたしを上から下まで舐めるように見つめた。

「ず、ずいぶんとおキレイになられたんですね……」

もう片方の店員の声を聞いて、
その「ナゾの若い女店員二人」の正体がわかった。

あたしが「シヨップ店員」として
はじめてマルキューに出勤した日、
さんざん騒いでいた

「高校を中退したのに、十八を過ぎても女子高生の
フリをしていたニートの金髪ピース女二人組」だった。

二人とも立派に更生していて、帽子から覗く髪の色は金ではなく
黒のショートヘア。ピースの穴もふさがっている。

「ミューナ、まあ座って、店長が来るまで店の中一緒に観察しよう」
「う、うん……」

二人は、相変わらず黙々と「開店準備」を続けていた。

制服も帽子もデザインは変わっていないが、

洗濯する時に漂白剤を使って、

きれいにアイロン掛けしているのであろう。

翔君のように「汚れ」が一切ない。

ぶつかった方は黙々と床にモップをかけ、

もう一人は黙々とカウンターや椅子の拭き掃除をしている。

内装は全く変わっていないかった。

大きな鉄板で焼くスタイルも、カウンター式も。

椅子も増えてもないし減ってもいない。キツカリ六つ。

ただ、全てがピカピカだ。天井も煙で汚れていない。

厨房を覗くと、真新しい業務用の「空気清浄機」があった。

カウンターの上には、なにも置かれていない。

マヨネーズも、青のりも、タレの容器も、灰皿も、割り箸すらもない。

（まあ、開店直前に置くんだろう）

と思ってクルリと後ろを振り向くと、

相変わらず翔君のバンドのポスターが貼ってあったが、

バンド名が「RITTER」から

「VIVA! VIVA! MASTERPIECE」

に変わっていた。「マスターピース」の意味は確か「傑作」

翔君とリズム隊の二人のルックスはさほど変わっていなかったが、衣装がガラリと変わっていた。

穴の開いたボロボロのジーンズを履いていたはずの三人が、モッズ系の黒く細いスーツを着ていて、

ネクタイの代わりに原色の「それっぽい開襟シャツ」の襟をはだけていた。

ボーカルのミワさんは相変わらず目立っていて美人だったが

「ロックっぽい」格好ではなく、

アメリカの女性シンガーが着るような、

ノースリーブに銀色、くるぶし丈の高級そうなスリット入りドレス。ボディラインがバッチリわかる。

手にはなぜか「羽根つきピンクのジュリセン」

その、一見ちぐはぐで、ダサかつこいい感じが

「VIVA! VIVA! MASTERPIECE ボーカル」
「ミワ」

によく似合っていた。

(ミワさんってやっぱりスタイルいいなあ……)

と思っていたらポスターの横に、なぜか安っぽい

白黒のチラシが二枚貼られていた。

よくアパートのポストに勝手に入っている、宅配AVチラシのよう
だ。

なぜ? と思い、席を立てて近くに行きマジマジと見たら、

やっぱりAVのチラシ。二枚とも「レパブリカ」ではない、

どう見ても安物の際どいショーツでギリギリ股間を隠していたが、女優の顔を見た瞬間にコメント不能になった。

芸名こそ違っていたが、上があゆみで、下がカンナだ……。

Vol. 65【職業に貴賤なし 第3話】

ガラッ！

「おはようございます。野菜届けに来ました。
今日のキャベツは超新鮮ですよー！」

重そうな野菜の入ったダンボールを持った女が入ってきた。声が…。

「麻巳子！」

「みうな？　なんでここにいるの？」

「麻巳子こそ！」

「悪徳エステの勧誘員」だった頃のルックスはどこへやら。
服装はジャージにスニーカー。中学生の頃にタイムスリップ
したような雰囲気だが、最低限の化粧はしっかりしている。

「いやあ、翔君と別れてからさあ、元の鞘に納まって」

「あの、ワセダの男？」

「うん、結婚した。ホラ」

麻巳子の左手薬指には、真新しい結婚指輪。カルティエの三連リングだ。

「で、なんでそんな格好で、キャベツ運んでるの……」

「仕事だもん。旦那の実家が千葉の農家でさ。」

主婦やりながら家の手伝いしてるの。

この辺の店が全部旦那の実家と契約してくれてね。

この指輪もなにをやってもずり落ちないようにって旦那がくれた。契約農家って結構儲かるのよ」

「え！ この契約農家なの？」

「うん。あ、ゴメン。みうなと会えたのは嬉しいけど、ゆっくり喋ってる暇ないんだ。次の店にソッコー野菜届けないと。またメールする、じゃあね〜!」

麻巳子はすぐに店から出て行ってしまった。

遠くの方で軽トラックが走り去る音がした。

二人の店員が、ダンボールに駆け寄り、伝票を確認して
キャベツ、ネギ、もやしなどの数量を数えている。
二人の息はぴったり合っている。ツーカーだ。

「宇崎さん、どういふんですか……」

「あ、店長が出勤したみたいだ。裏口から」

店の奥の扉が閉まる音がした。ガサゴソ音がする。

「なんで表口から来ないんですかね？」

「従業員は裏口から入店するのが基本だろ？
今ごろ制服に着替えてるんだろ？」

やがて「お好み焼き 狸々」の「店長」が厨房にやってきた。

「店長」の顔を見たたん、咄嗟に大声で叫んでしまった。

「しゃちよー……！」

vol.66【職業に貴賤なし 第4話】

「はっはっは、まさか君達がいるとはね。

どうも『お好み焼き 狸々』の店長、小澤です」

「う、宇崎さん？ これってもしかして……」

「ドッキリ」

宇崎はごく短く言った。あたしはイスから転げ落ちてしまった。

「大丈夫？ 高木さん」

「ただ、大丈夫ですけど、びっくりしちゃって……」

「まあ、開店までまだ時間あるし、

雑用は彼女達に全部任せてるから。

仕込みしながらゆっくり話そうか」

元「DIY」代表取締役、現「お好み焼き 狸々」店長の

小澤さんは、どういう経緯でこういうことになったのか、

全てを話してくれた。最初から。

「DIY」がまだ小さい会社だった頃、
小澤さんは面接を担当していたという。

当時の「DIY」は社員、店員合わせて

従業員二十人程度の「ベンチャー企業」だった。

小澤さんは面接の他にも、商品制作や、総務などを担当していて、
他の社員もいくつもの仕事を掛け持ちしていた。

「ベンチャー企業」という名の「零細企業」は、
そうでもないと言っていけない。

ただ「時代の流れにあえて逆らい、結婚式にも着ていけるような
フォーマルな服をつくって売る」ことだけ決まっ
ていて、
それが「何色」という肝心なところが決ま
っていなかったという。
当時は社名も「DIY！ OUT OF BLACK」
ではなかつたそう。

「面接に来る子はね、みんな髪を染めて、
原色の服を着ていたよ。そこに、黒い服が
よく似合う、
二十二歳の上品な女性が現れてね。
彼女を見たたん『これだ！』と思っ
たんだよ」

「えみ……いや、榊えみさんのこと
ですよ？」

「うん。高級そうな黒のリクルート
スーツで面接に来る、
しつかりとした女性で、いくつも内
定もらっているんだろうと思っ
たら」

「本当はデザイナー志望だけど、ど
こにも受からない。
販売員も書類審査で落とされる」
って聞いてたまげたよ。
履歴書の字がすごくきれいで丁寧
だったし、
職務経歴書までパソコンでしつかり
つくってて」

しかも「それどこのブランドのスー
ツ？」って聞いたら
「全部自分で創りました」だって。
「これは逸材だ！」って思った。
だから僕は彼女にちよつと意地悪な
質問をしたんだ」

「もしかして『キミは黒が似合う
ね。』」

三年しか働けないけど、いい？』って？」

「そう。彼女は目をキラキラさせて

『はい！是非お願いいたします！』って言って頭を下げたんだよ。その時僕は思ったね

『彼女にこの会社でおもいきり好きなことをさせたい』って。その場で内定を出したんだ」

「榊さんは『面接官はとくにリストラされている』と言ってましたか？」

「はっはっはっは、彼女らしいね！

そんなこと言ってたんだ」。知ってたけど」

「え？」

「彼女には大人の女性としての全てが揃っていたし、本当はデザインをやって欲しかったんだけど、

当時はねえ、とにかく販売員の手が足りなくて。

仕方なく販売の方に回ってもらったんだ。

『悪いけど、三年だけ我慢してくれ』って。

彼女も黒い服だけじゃなくて、当時流行りのカラフルな古着のワンピースを着て、

よく『内定者の飲み会』に参加してたけど、酒の席でつい言っちゃったんだよね。

『そういう浮ついた洋服はキミには似合わない』って。

それ以来、彼女はモノトーンの服しか着なくなっちゃってさ」

「榊さんらしいですね」

vol.67【職業に貴賤なし 第5話】

とにかく「黒」が似合い、原色の服を着ている

女の子よりも目立ってしまう「榊えみりちゃん」のことが

入社前に社員の間で話題になり、販売員として入社する直前に、

社名を「DIY! OUT OF BLACK」に変え

黒い服を前面に売り出すことが決定し、

急ぎよ「三年以上服飾会社で『デザイン』

『制作』の経験のある方」を、求人雑誌や新聞で募集したところ、百人を超える応募者が来たらしい。

「『将来性のある人』より『即戦力』が欲しかったんだ。

でも志望者が多すぎてね。面接でおもいきりふるい落としたんだよ。

『黒い服をつくったことがありますか?』って聞いて

『ありません』と答えた人はその場で不合格。

『あります』とか『黒はつくったことはありませんが、是非挑戦してみたいです』って答えた人には

『この会社に入ったらどんな黒をつくりたいですか?』ってすぐに聞いて、

安易に『スーツ』『コート』って答えた人は即不合格。

『勝負下着、もちろんガーターベルト』

『ヴィヴィアン・リーが、着たとたんにクルクル踊るような喪服』

『昔よく着てた特攻服を黒のエナメルでつくりたいですね』

『バニーガールとSMクラブの女王様を混ぜたようなとにかくエロ

い服』

なんていう、突拍子もない答えをした人はその場で合格。

一見ムチャクチャに見えるけど、だいたい百人いたうちのほとんどが『スーツ』『コート』って答えてて、

たまたま四人が無茶なこと答えてただけなんだよ」

「で、その四人を採用したと？」

「そう。語弊があるけど、普通の人より『変な人』が欲しくて。その時思っただよ。『ああ、デザイナーも百人いたら

九十六人は普通の人なんだなあ』って。

『変な人を採用する』っていうスタンスは会社が潰れるまでずっと変わらなかったね。どの部署でも」

「ああ、だから麻巳子じゃなくてあたしを採ったんですね……」

「うーん、まあそういうことだね。でもねえ、

榊さんが『DIY』の服をつくっていた時に、

売っていたんだけどお客さんがみんな『普通の人』になっちゃった。

そこでやっと、会社を大きくするには、創り手が『変な人』でも

『普通』のお客さんに受け入れられないとダメだったことに気がついてね。

その頃周りの人間によく言われたね

『小澤さんと榊さんは結束固いですね』って。

『不倫してる』とかウワサされて。

でもね、何年か我慢したら気がついたら僕が社長になってて、榊さんが部長になってて、会社が大きくなってた」

「やっぱり、小澤社長が一番『変な人』なんですね。

気がついたら出世していたなんて……」

「僕、いまだに独身だしね」

「へ？」

「うん。モーレッツ社員してたら、いつの間にか適齢期過ぎちゃって、誰も僕と結婚してくれないの。だから若い社員は全員僕の子供に見えちゃうんだよね」

「え！ 店長って独身だったんですか？ あ、あたし立候補します！」

「あたしも！ 店長の奥方に立候補いたします！」

「ダメ。かわいい子供とは結婚しません」

「えーーーーーっ！」

「っていうかさあ…… あーあ、彼女達の口癖うつっちゃった。

僕は至って真面目に仕事をしていただけで、

榊さんとはあまり接点がなかったのにね。

『不倫してる』なんてウワサを流すのはたいてい

『私って、変わってるからあー！』って自分の口で言っちゃう

普通の人だったね。榊さんはそういう人には天罰を与えていたよ。

僕は遠くから榊さんの活躍ぶりを見守るのが楽しかっただけなのにねえ」

そういえば、榊えみりは『伝説』の中で

『洋服には流行り廃りがあるから、私より若い子がつくる

洋服の方が売れる時代になった』と言っていた。

たぶんその頃から『原色』ブームが廃れ、

ギャル向け雑誌にも『黒い服』がたくさん掲載されるようになり

『黒のリクルートスーツに、白いシャツを合わせて就職活動する女子大生』

をたくさん街で見かけるようになったのだろう。

「僕はホント周りから見たら『ひねくれジジイ』だったみたいだね。黒い服つくってる会社の社長なのに、当たり前のように黒スーツ着てそこら辺歩いてる女子大生に、ムカついてムカついて。

その頃から会社はそのままにして

『なにか面白いことやりたいなあ』って思いながら、たまたまセンター街の奥の奥歩いてたら、面白い洋服屋さんいっぱい見つけてね。

でも、たいていそういうお店って外人が店長やってるでしょ？

さすがに外国人をいきなり雇ったら

『普通のお客さん』が退いちゃうじゃない？

そしたら『レパブリカ』見つけて

『すごいもん売ってる店だなあ』と思って嗅覚だけで店に入ったら、いきなり宇崎君と目が合っちゃってさあ

『なにしにきたんだこのジジイ』って目で見られたから、あわてて名刺出して自己紹介して逃げてきた」

「え！ それ僕覚えてます！ あれ小澤社長だったんですか？」

「いやいや、あの頃の僕は老けちゃって恥ずかしいから、若作りのために夜でもサングラスかけてたからね。

『変な人』通り越して『怪しい人』に見えちゃったんだろうね。名刺出したら自己紹介する前に、宇崎君に名刺破られちゃった。『怖っ！』と思って逃げたの」

「それ逆ドッキリですよ。大変失礼いたしました！」

「いーのいーの、失礼なのは僕の方だから。」

でも『レパブリカ』って面白い店だなあとはその頃から思ってたね。宇崎君から企画書が届いた時は本当に嬉しかったよ」

「僕も、名刺破っちゃいましたけど『DIY』っていう社名だけはずっと覚えてました。

で、何年か後に翔と呑みに行ったら、

たまたまミューナと呑んでる麻巳子さんに、あのバカが声かけて」

「あはははは！ 翔君はミワさんのことがずっと好きだったのになえ」

「翔君がミワさんを？」

「ミワさんねえ、結婚しちゃったんだよ」

「え！ 誰と？」

「『RITTER』を

『VIVA！ VIVA！ MASTERPIECE』に変えて、デビュー当時から世話やいてたプロデューサーなんだって。

彼女達に教えてもらったよ」

「私も『ビバビバ』になって、結婚してからのミワさん大好きなんですよー！」

「『RITTER』時代は、浜井さんとミワさんのバンドって感じだったけど『ビバビバ』で、

ミワさんだけをメインにしたの正解だったよねー！」

vol.69【職業に貴賤なし 第7話】

♪プルル♪プルル♪プルル♪プルル。

店の電話が鳴った。「DIY」の着信音と同じ。

「使い回しだ」と言ったら小澤店長に「エコロジーだ」と返された。

「はい。狸々です……なんだ、翔君また愚痴？

ごめんね。今立て込んでるから

夜にでも僕の携帯に電話して、じゃあねー！」

ガチャ。

「え？ 翔君が小澤社長に愚痴？」

「うん。この店と引き換えに夢をかなえたのはいいんだけど、音楽業界ってなかなか思い通りにいかないみたいだね。

『イメージ変えろって言われた』とか

『バンド名変えろって言われた』とか、

レコード会社の人間と衝突するたびに、

この店に電話して来るんだよ。矛盾してるよね」

「しょうがないですよ。翔はいつまでたってもノンポリですから」

「そーそーそーそー。翔君は本名が悪いよね」

「ははははは！ 浜井翔って『はあ、まあいつしょ』ですからね。翔の親って名前つけるとき『音読』しなかったんでしょかねえ？ やっと長年の疑問が解けましたよ」

確かに宇崎の言う通りだ。浜井翔はあ、まあいいつしょ……。

「僕、お好み焼き大好きでね。だから『DIY』が潰れかけてる時にはじめてここ来たら、

翔君のやつつけ仕事っぷりに頭来て『お好み焼き』で一時間くらい議論しちゃってさあ」

「お好み焼きで議論？」

「翔君さあ『俺が目指してるのはバンドだから、この店は収入源として割り切ってる』ってはっきり言っただよね。

頭来て頭来て、僕『本当においしいお好み焼きっていうのは、マヨネーズだのタレだのかけなくてもおいしいの！』って怒鳴ったら『お好み焼きっていうのはマヨネーズとタレを大量にかければ誰が焼いても美味いんだ！ そんなにオッサンお好み焼きにこだわってるなら、デビュー決まってるからこんな店くれてやるよ！』

っていきがっちゃって。で、ありがたく頂戴したわけ」

「社長……」

「なに？ 高木さん。あ、店長って呼んで」

「もしかしてこのお店、マヨネーズとタレそのものがないんですか？」

「ないよ。青のりもない。味がないからあんまり意味ないでしょ？ 歯にくっついちゃうしね。でもおいしいよ」

「ミューナさん！ 本当に店長の焼くお好み焼きは
なにもつけなくてもおいしいんです！」

「私達も、はじめて来たときに『なにもつけないで食べるの？』
ってビックリしましたけど、マジでおいしいですから！
賄いが出るから二人でここに就職したようなものです！」

「就職？ 彼女達、バイトじゃないんですか？」

「彼女達はれっきとしたこの社員だよ。
ちゃんと保険にも加入させてるし」

「あ、あのう……彼女達のお給料聞いちゃていいですか？
」手取りで二十三万くらいはあげてるよね」

「店長！ それくらい貰わないと割に合いませんよ。
早朝から夜客がいなくなるまで働かされるんですから」
「え？ 何時ぐらいまで働くの？」

「まあ、日によって違うけど、平日だと夜十時くらいかな。
週末だと気がついたら日付が変わってますもんね。
でも、時間忘れるほど楽しいですよ。ここで働くの」

「まあ、ここいろんな雑誌に載っちゃったしね。
大型連休になると大阪とか九州からとかもお客さん来るよ。
さすがに労働基準法に違反するから、最近は夜七時キツカリに
行列止めるようにしてる。【今日はここで終わりです】っていう
デッカイ看板までつくって。あ、もう店の外に十人くらい並んでる」

「じゃあ、俺達そろそろ帰ります」

「え！ 食べていけないの？ ウチのお好み焼き」

「俺達いると、営業妨害になっちゃうんで……」

「そんなことないですよ！ 本当に美味しいんですよ！
タダでいいんで食べてってくださいよ、店長のつくったお好み焼き」

「いや、帰ります……」

「ごめんね〜！ また来てね〜！」

あたしを「ドッキリ」させようと思った宇崎が
小澤店長に逆ドッキリされてしまい、
宇崎はガツクリと肩を落として店を出た。

「こんなはずじゃなかったのにな」

「あたしも、小澤社長のキレっぷりに疲れました……」

「ミューナ、俺のウチ来る？」

「はい」

あたし達はモヤイまで歩くと、
タクシーを拾って宇崎の住むマンションに行った。

vol.70【代表取締役 小澤喜代彦 第1話】（前書き）

一週間の更新です。

vol.70【代表取締役 小澤喜代彦 第1話】

「結局、宇崎さんはなんのために

『狸々』にあたしを連れて行っただんですか？」

「“ドッキリ”のはずだったんだけど、

店員の若い二人も麻巳さんもあゆみさんもカンナさんも

翔も小澤社長も『なりたいものになって、やりたい放題やってる』

って『店長』に説教されに行っただけかもしれないな……

榊さんのその後の話は出てこなかったけど、

今頃は病気も治って、元気になにかやってるんじゃない？」

「宇崎さん、マンションに着いたら、

榊さんのことについて知っている範囲で教えてください」

「わかったよ」

タクシーが三宿の宇崎のマンションに着いた。

「宇崎さん」

「なに？」

「三宿に住んでるならなんでモヤイまで戻ったの？」

あそこからドーゲン登りきったあたりで

タクシー拾うほうが早いし安いのに！」

「ドーゲン上りきったところに、翔が所属してるレコード会社
あるから、はちあわせしちゃうマズイと思ってね」

宇崎が借りている三宿のマンションは、
あたしが借りている日吉のアパートより狭かった。
あたしのアパートは1DKだが、ここはどう見ても1K。
風呂もトイレもあるが狭いユニットバス。

家具は黒のテーブルとその上に置いてあるパソコンと
周辺機器と本棚とシングルベッドと電子レンジだけ。
一応エアコン、冷蔵庫、コンロ完備だが、
冷蔵庫は小さく、コンロもたった一つ。

「宇崎さん、ツツこんでいいですか？」
「どうぞ」

「ここ、家賃いくらですか？」
「十四万とちよつと」

「ウチのアパートが三部屋借りられますよ！」
「狭くても家賃高くても、絶対に畳部屋には住みたくなかったの！」

「なんで？」
「ジメジメしちゃうから！」

床はピカピカのフローリングだ。

「フローリングの方が掃除楽だろう？ 掃除機置く必要ないし」
「確かに、ウチのアパートにも掃除機ありますが、邪魔です」

「そこらへんの店で買った使い捨てのモップで掃除すれば
キレイになっちゃうし、そのテーブルも、ベッドも、本棚も、
通販で買ったやつを自分で組み立てた。

言っとくけど、この部屋収納スペースすごいんだよ、ホラ！」

「あの、宇崎さんと喋っているとどんだん話が

脱線していきます。早く榊さんのことを……」

「俺が知ってるのは、榊えみりが中目黒のオフィスビルで、
有能な元社員だけを呼び戻して、

新しいアパレル会社の社長やってることだけ」

「病気は？」

「会社辞めた後、二週間ほど海外旅行したらケロツと治ったらしい
よ。

それよりここの部屋の収納はすごいんだ！ 見てみるミューナ！」

部屋には小さなクローゼットがあるきりだったが、
通販で買った「テーブルセット」はテーブルの他に回転椅子、
小さな机兼二重の引き出しがついていた。

本棚は細長く、天井ギリギリの高さでスライド式。

シングルベッドの下にまでスライド式の収納スペースがある。

家具も収納箱も、全部黒。安物だが乾燥機付き洗濯機も
しっかり部屋の中に置いてある。

「つまり、収納スペースを自分でつくったと」

「そういうことだ。部屋に収納スペースがなかったら

自分で工夫してつくればいい」

「生活の知恵ですね」

「まあね。さあ、榊えみりの話をしようか」

「もういいです」

「いや、あの人には本当に悪いことをした。ミューナにも」

「え？」

「俺が『DIY』にプレゼンに行ったとき、その後すぐ社内会議をしただろう？」

「ああ、はい」

「社内会議の参加者は、小澤社長と俺の二人だけだった」

そういえば、榊えみりは社内会議の結果を総務部のデスクの内線電話で聞いていた。

vol. 71【代表取締役 小澤喜代彦 第2話】

「あれは、社内会議という名の、社長のお説教だったんだ」
「お説教？」

「小澤社長は、まず俺に『顔を洗って出直して来い！』と怒鳴ったんだ。

次に言われたのは

『大事な社員のルックスを安易に変えようとするな』だった。

次は『一人で会社ごっこしてる奴が、うちの会社が潰れたとき、損失補填出来るものならやってみろ！』

で、次は『美肌、痩身は許すが、整形は高木君が承諾しても、俺は絶対に承諾しない』

で、その次が『ウチの会社は“DIY”じゃなくて“DIY！”だ！』って。

あとは『著作権』『特許』がなんたらかんたらって長い説教くらって、社内会議は終わった」

「それで？」

「咄嗟に言ったよ。『三十分頭を冷やす時間をください』ってね。小澤社長は無言でうなずいて部屋を出て行った。

その間に、必死でプランを練り直した。

三十分後、キツカリ社長が部屋に戻ってきて『どうだね？』と言った。

『整形はやめます。女性は痩せれば顔つきが変わりますし、メイクと衣装で化けますから』
って言ったら、小澤社長はニッコリ笑って

『ウチがスポンサーになります。三ヶ月計画でやりましょう、最初の三ヶ月で、高木君を確実に健康的なモデル体型にしなさい。三ヶ月ごとに僕から宇崎さんに課題を出しますが、それでよろしいですね?』って言ったんだ。

俺は『是非、お願いいたします』と言って頭を下げて、社内会議が正式に終わった」

「一時間もかからなかったでしょう?」

「うん。小澤社長は、社員一人一人をすごく大事に扱う人だった。仮撮影の時笑いながらミューナを撮影してた

フリーカメラマンいただろう? あいつを即担当から外したのも、社長」

「あの時、現場に社長いましたね。宇崎さんワザと大声で

『全部ピントがずれている』って言ったんですか?」

「そう。社長がそのカメラマンをスタジオの隅に呼び出して

『こんなに写真が下手なカメラマンは見たことがない、

キミにはプロジェクトメンバーから外れてもらう』と言って、宣伝部とずっと長い付き合いをしていた

馴染みのフリーカメラマンにその場で切り替えた」

「社長は、本当に実力があって信頼できる人しか使いませんからね」

「その中には、俺とミューナも入っていたんだぜ。もちろん榊えみりも」

「その三人は『お好み焼き 狸々』のビジネスからは外されたんですね」

「榊えみりだけは外されていない」

「え?」

「まったく……人の話はちゃんと聞けミューナ！
言っただろ？ あの人の中目黒のあのビルで社長をやっているんだ。
社長は俺じゃなくてあの人に暖簾を分けたんだ。
あの人には、本当に申し訳ないことをしてしまったからな」

vol.72【代表取締役 小澤喜代彦 第3話】

さつき「お好み焼き 狸々」に行ったとき、小澤店長は、レパブリカのことはずっと前から知っていて、数年後、宇崎が企画書をFAXしたとき嬉しかったと言っていた。それと関係があるのだろうか？

「『DIY』に営業を仕掛けるために、俺はあの人と一度だけ寝た」
小澤社長は、それにものすごく腹を立て、宇崎の顔をブン殴ったらしい。

そんなことをしなくても、社長はレパブリカのことをずっと前から知っていて、宇崎の企画書を心待ちにしていたというのに。

たった一度のあやまちで、仕事一筋だった榊えみりが「欲求不満のメス」になってしまった。

「『一度だけ』っていうのは表向き。あの人は俺のことを追いかけてしまったみたいだね。

仕事でミスをするたびに、あの人をこの部屋に呼び出して、何度も何度も寝た。あの人はそんな俺にハマってしまったみたいで、給料からどんどん俺に貢いでくれた。

俺も、あの人も社長には絶対にそれを言わなかった。

社長にバレた時点で『MYUNA』のプロジェクトは終わってしまうから。そのためだけに

俺は交際しているフリをして、

あの人も俺と交際しているフリをしていた。あの人はどんどん病ん

でいった」

「あの人あの人って……せめて『彼女』って言えないの？
本当にあなたは酷いことをしたんですね」

あたしは、バッグからずっと取っておいたものを出し、宇崎に見せた。

【榊えみり様 抗うつ剤 夕食後一回分】と印刷された薬の袋。

「ここまで……俺はいくつになってもダメ人間だな」

宇崎は、長い話をした。

美大時代の『彼女』について。

vol. 73【エゴと愛情の狭間 第1話】

宇崎は学生時代、同じ美大に通う女と交際していた。

センスと行動力は抜群だったが、彼女はルックスに少々難があった。

美大卒業後、彼女は単身ニューヨークに行って
ブティックをオープンすると意気込んでいたが、
アメリカでは、いくらセンスがよくても、
それなりのルックスでないと成功しない。

それを宇崎は懇々と説明したものの、
彼女はそのままのルックスで旅立ってしまった。

宇崎はマメに国際電話で連絡を取っていたが、
あるとき急に音信不通になって、それっきりだという。

「日本だけでヒットした女性歌手で、
アメリカでも成功した奴なんて昔も今もないだろ？
似たようなもんだよ、それと」

宇崎があたしを綺麗にしようと思ったきっかけは、
昔愛した女の面影を引くあたしを、

自らの手で綺麗にしたいというエゴだった。

長年付き合った彼女と音信不通になった後、

宇崎はショックでいろいろな女と寝まくった。

すでに大手下着メーカーにデザイナーとして就職していた宇崎だったが、

同じ会社の女とも手当たり次第に寝ていた宇崎は、
ある女からの内部告発で、

下着メーカーをたった一年足らずで解雇された。

それからの宇崎は、長い間恋人をつくらず

「レパブリカ」を出店する資金を貯めるために、

昼は道路工事、夜はホストクラブで働いた。

もちろん、どんな客とも寝た。

資金は二年ほどで貯まったが、当時の宇崎はすぐには

「レパブリカ」の準備を始めることができなかった。

慢性的な睡眠不足と、道路工事の重労働、

さらに肉体や精神を切り売りする上、大量の酒を飲まない仕事にならないホストクラブ。

身も心もボロボロだった当時二十五歳の宇崎は、

資金にはほとんど手をつけず、三ヶ月ほど、

この部屋から一步も出ない生活を送り、

ベッドに横たわり、体と精神が元に戻るまで、

誰とも会わずにたった一人でとにかく寝ていた。

食事は全てデリバリーで済ませていたという。

三ヶ月の間、飽きるまで寝た宇崎は、ようやく「レパブリカ」の準備を始めた。

最初の準備は翔君と渋谷に行き、カフェバーで二人組の女をキャッチセールスのようにナンパし、

派手な下着と地味な下着をその場でプレゼントして、

地味な下着を手に取った女と付き合うこと。

そのカフェバーはあたしと麻巳子がはじめて

二人で行ったのと同じ店。

あたしも「地味な下着を手にとった」大勢の女の一人だった。

「レパブリカ」はとくにオープンしていたが、

あたしに知り合ってから宇崎はそれをキツパリやめたという。

vol.74【エゴと愛情の狭間 第2話】

宇崎は、あたしと知り合う前も、知り合ってからずっと病んでいた。

今も病んでいる。

淡々と昔のことを話す宇崎の表情は暗かった。

あたしは、宇崎の笑う顔が見たかったので、話題を切り替えた。

「宇崎さんが、はじめてパンツをつくったのは何歳のときですか？」

宇崎は口元に微笑を浮かべながら矢のように話しはじめた。

「パンツは物心ついた時からつくってたな。

はじめてつくったのっていつだろ？

五歳ぐらいのときかな？

母親が洋裁得意で、暇さえあれば電動ミシンに張り付いててさ
『俺もなんかつくれねーかな？

そうだ！ 新しいパンツ欲しいからパンツつくろっ！』ってね。

ミシンの使い方はもちろん、布とか糸とか、

どうすりゃいいかなんてわかんないけど、

とりあえずミシンいじくって、パンツらしきものが

できたときには『やったー！』って思ったけど、

そのときミシンぶっ壊しちゃったみたいで、

後で母親にグーで脳天殴られて、メチャクチャ叱られた」

「ははははは！ すごいですね。

五歳のときからパンツつくってたなんて」

「母親が理解のある人でさ『あんたもミシン覚えたいの？』
って言われて、その頃からミシンの英才教育受けてた。

自分で着るための浴衣とか、シャツとか、パジャマとかね。
二人で下町の布屋に行って、好きな柄選ばせてもらったり。
おかげで、布屋のバアちゃんに顔が割れたよ

『あらボク、また布買いに来たの？ 偉いわねえどれにする？』
って言いながら、顔クシャクシャにしてね」

「きつと、宇崎さんのことが、孫みたいにかわいかったんでしょ
うね」

「あはははは！ そういやよくアメ玉もらったな、
あのバアちゃんに。まあ、パンツ屋になったのは、

やっぱり生まれてはじめてミシンいじくって脳天殴られたときの
衝撃が残ってたのかねえ？ 命の次にミシン大事にしたもんな。
将来なになりたいかなんて、

けっこいい加減なことがキツカケだったりするし」

「それは、お母さんが大切にしてたミシンを
壊したときにつくったものが、たまたまパンツだったから？」

「そう、メチャクチャいい加減でしょ？」

「それで、二人の女がいたら、派手な下着と地味な下着を
プレゼントして、地味な方を手に取った女と付き合っていたと」
「地味な方は、全部サニタリーショーツだったんだ」

「えっ？」

「サニタリーショーツだけは、未だにうまくつくれない。
だって俺、男だもん。朝立ちや夢精はしたことあるけど、

生理になったことはないからさ。サニタリーショーツを
完璧につくるために女と付き合ってたようなもんだよ、
酷いよなあ、我ながら」

vol.75【エゴと愛情の狭間 第3話】

「自分で『酷いこと』って自覚してるのに、
どうしてサニタリーショーツまで極めようとしたんですか？」

「それは……ミューナにはグロい話だけど、
美大時代に付き合ってた女の家泊まりに行ったとき、
彼女が突然生理になっちゃって。」

まあ、お互い隠すところがない付き合いだったから、
あいつ、俺の目の前で、急いでクローゼット開けて
サニタリーショーツ履いてナプキンとタンポンつけたんだけど……」

「つけたんだけど？」

「ミューナ、どうしても喋らなきゃダメ？」

「ダメです」

「わかったよ……汚かったんだ、とにかく汚かった」

「ショーツが？」

「そう。木綿でできたダサダサのやつで、ところどころに、
洗濯じゃ落ちないのかね？ シミがいつぱいついてた。

さすがにその時の感想は彼女には直接言えなかったけど

『完璧なサニタリーショーツをつくるのも俺の使命』

って勝手に思った。でも、いまだに鬼門だし、商品化できねえよ」

「宇崎さん」

「ん？」

「宇崎さんとはじめて会ったときに貰った、
ベージュのサニタリーショーツって、

試作品だって言ってましたけど、まだ試作品の段階なんですか？」

「そうだけど？」

「あたし、あれはすでに商品化されてるものだとばかり思ってた……」

「え？ どうして？」

「だって、今まで使ったサニタリーショーツの中で、
一番使いやすいし。生理が来るたびに、

あたし、あれ愛用してたんですけど……」

「マジ？ え！ なんでもっと早く教えてくれなかったの？」

「いや、だって、女同士でもサニタリーショーツの
情報交換なんてしないし、サニタリーショーツって
前面に出して売る商品じゃないし、

ましてや宇崎さんがパンツ屋だからって、

男の人とそういう話するなんてありえない……」

「俺、サニタリーショーツ、完璧につくれてたんだ」

「少なくとも、あたしがもらったのは、完璧でした」

「そうか、そうか……」

宇崎は、いきなり泣き出した。パンツ屋の店長だからといって、
男がサニタリーショーツまで極める必要はないと思っていた。

それなのに、宇崎は完璧なサニタリーショーツをつくる事ができた、
ただそれだけで、あたしの目の前で号泣している。

パンツをつくるために、パンツを売るために、
パンツに生涯をかけるために生まれてきた男。
パンツを極めるために生まれてきた業の深い男。
いい加減なところばかり目立つけど、根がクソ真面目な男。
完璧なサニタリーショーツをつくれたことを知っただけで、
女の前で号泣する男。

次の瞬間、あたしは宇崎を思いっきり抱きしめた。
愛おしくて愛おしくて抱きしめずにはいらなかった。
あたしは生まれてはじめて、自分から男の胸に抱きついた。

その日あたしは、モデルとしてのはじめてのギャラである、
水色に赤いハートのアップリケの、
もはやブカブカのキングレサイズのブラジャーと
パンティをあらかじめ身につけていた。

宇崎の巧みなリードによって、二十五の誕生日を前に、
あたしはやっとバージンを捨てた。

vol.76【エゴと愛情の狭間 第4話】

「ありがとう」

「え？」

「エゴとはいえ、あたしをこんなに綺麗にしてくださって」
「ミューナ」

「なんででしょう？」

「ブラジャーも、パンティーもブカブカだったよ」

「だってあれ、キングレサイズですもん」

「Mサイズでいいのに。もしかして、俺のためにずっとあれを？」

「取っておきました。『ミューナ』への最初のギャラはあれですか」
「ら」

「ミューナ。日吉脱出して、田園調布に家を建てよう。

メイドも家政婦も雇わないで、

二人きりで暮らせる小さな家を。俺、一からまたやるから」

「あたしは、トーヨー沿線に住むこと自体に飽きました」

「どこに住みたいの？」

「海外」

「じゃあ、ソマリア」

「いやです」

「じゃあ、ニューヨーク」

「テロとか病気とか大丈夫なんでしょうか？」

「大丈夫みたいだよ」

「それなら……あ」

「なに？」

「何年か前に、マイケル・ジャ……」

「あれが住んでいたのはニューヨークじゃなくてロス。

デカイ大陸の反対側だ。暴動なんかまず起きないから気にすんな」

あたし達は、裸のままその場で結婚した。

結婚指輪は、部屋にたまたま転がっていた丸いカーテンレール。

婚姻届は出さなかった。日本で籍を入れても意味がない。

last scene【靴を脱ぎ棄てて 前半】

それから、ニューヨークでの全ての資金を稼ぐため、宇崎は「お好み焼き 狸々」に就職して真面目に働いた。

あたしは中目黒にある「代表取締役 榊えみり」の新会社に再就職することも考えたが、

榊えみりは昔、旦那と寝た女。そんな女の部下として働くのは違う。

「今の自分自身」を最大限に生かす仕事があったので、芸能事務所に所属し、雑誌やテレビなどで活躍する、口が達者なカリスマモデル、芸名：宇崎みうなとして働いた。

榊えみりの新会社の社名は「NOT FOR SALE」

「非売品」という意味だが、だったら売ると言いたい。

「NOT FOR SALE」は、「DIY!」のような

「自社制作のアパレルブランド会社」ではなく、

今流行りの「アウトレット業者」だからだ。

「商品開発部・制作部」のフロアはもはや「倉庫」と化していて、一流から三流以下まで、いろいろなブランドから

「キズ物、ハンパ物」という名目の

「バーゲンで売れ残ったダサい服」が大量に置いてあり、

元総務部社員、元販売部社員は全員

「若い女だから」

というだけで、南大沢や、南町田などの

東京郊外のアウトレットモールで強制的に店長をやらされ、三カ月ノルマを達成できない場合には御殿場まで飛ばされる。

店員は全員アルバイト。二十五歳の誕生日どころか、ほぼ全員たったの一日で辞表も出さず

「辞めます」とも言わずに消えてゆく。

理由はほとんどこう。

「丸一日立つてる体力ないから、もっとお給料のいい、事務のお仕事探します」

もちろん、末端の事務員は全員「ハケン」を使っている始末。しかも「NOT FOR SALE」で売り子のバイトをしていた女が「NOT FOR SALE」総務部に派遣会社からやって来て

「売り子の仕事は疲れるので、派遣業者に登録したら、なぜかここに連れてこられましたけど、何か？」

とほざき、面接担当者が渋々「明日から来てください」というようなことも実際にあったようだ。

当然「元社員」「新入社員」「ハケン」「アルバイト」

すべての定着率が悪く、回転寿司屋のごとくコロコロ人材が変わる。

榊えみりは唯一のチャームポイント「プライド」を捨てて

「NOT FOR SALE」を「薄利多売」の会社にしたようだ。

人件費を削りまくっている会社に優良企業はない。

ネットのアングラ掲示板にも

「【悪の秘密結社】NOT FOR SALE
だけには就職すんな【第三十六章】」

などというスレが乱立している。

榊えみりは目先の利益だけに囚われて、本来の目的

「自社ブランドの本当に良い商品を、
それなりの値段で箔をつけて売る」

ことを忘れてしまっているようだ。

last scene【靴を脱ぎ棄てて 後半】

いつものようにテレビの仕事をしていると、
マネージャーに週刊誌を渡された。

「モデル兼タレント宇崎みうな

（元：トーヨコミュニナ）のフィアンセ

（元：レパブリカ宇崎洋平）はお好み焼屋の店員」

（だからどうした？）という印象しかなかったが、
すっぱ抜かれたので、普通に記者会見を開いたら、

「以前から社会問題になっている『食の安全』について、
朝のニュース番組でゲストコメンテーターとして
是非お話をお伺いしたいです」

という仕事のオファーが来たので、
面白半分で一回だけ出演したら、
なぜかその番組の「金曜日の朝の顔」として
レギュラー出演が決まってしまった。

数年後、ニューヨークに行くための
資金を働いて稼いだ私達夫婦は、
ケネディ空港行きの飛行機に乗っていた。

店長が宇崎、売り子があたしの、
小さなランジェリーショップを二人で経営するために。

TO:麻巳子

TO:翔君

件名: ミュウナっち

本文: 日本しばらくサヨナラ。失敗したら戻ってきます。

あたしはテレビでも雑誌でも、最後はこうやってしめてたからね。

「すべて、ダンナのおかげです」

そう言つて、左手薬指を見せるだけで笑いがとれる。
なんせ「カーテンレール」だもの。

流行語大賞とつちやったわよん。グッピー♪

ピッ。

「よし、送信」

「みうな」

「なに？」

「飛行機の中で携帯いじくるな。デーモンさんから返事が来るから」

「あ、マジでデーモンさんから返事来ちゃった……」

「二人にはあとで、その内容のエアメールでも出しとけ」

「はい」

「みうな、ニューヨーク着いたら最初になにしたい？」

「あんたの元カノの搜索願い出したい」

「アホ。もつとちゃんとした指輪買ってやるよ。寝るぞ俺」

「あたしもねむい」

そのままあたし達二人は、互いの手を握り合って、飛行機がニューヨークに着くまでグーグー寝た。

（了）

あとがきにかえて

「トーヨコミュニナ」以前の私の作風は
血で血を洗うような殺伐とした人間ドラマが主であり、
ハッピーエンドなのかバッドエンドなのか
よくわからないあいまいなものでした。

ある時「トーヨコミュニナ」とは別に
コメディ要素のあるドロドロした昼ドラ的小説を書き上げ、
昔馴染みの雑誌編集者に見せたところ
「これは是非漫画で読みたいもんだね」
という意見を頂き、某成人向けコミック誌に自ら売り込みに行きま
した。

結果は不採用でしたが

その時、拙い原稿を最後まで読んでいただいた編集者様から
厳しくもありがたいご意見を頂きました。

「貴方の小説にはドラマがありそこそこ読み応えがあるが、
テーマが重すぎる、読んでいて辛い上、主人公に魅力を感じない。
そもそも漫画や小説というモノは読んで楽しむもの。
辛い、つまらないと思いながらページをめくる人はいないし、
つまらないとわかっていいる娯楽にお金を出す人間はいません」

この時自分の最大の欠点である
「ハッピーエンドで終わる小説がどうしても書けない」
ということに気づかされました。

さらにその編集者様からのアドバイス。

「貴方が今回持ち込んだ原作には

辛くドロドロした人間ドラマの中にも
ホッと一息つけるコメディ要素がある。

一度、若い女性を主人公にした成長物語を書いてみては？

若い女性の成長物語というのは永遠に人気のあるジャンルですし
貴方に向いているジャンルであるとわたくしは思います。

それから、結末は絶対にハッピーエンドで。

漫画や小説を好んで読む人は皆ハッピーエンドを期待します」

こうして出来上がったのが「トヨコミュニナ」です。

周囲の皆様からの意見によって

やっとハッピーエンドで終わる小説を書くことが出来ました。

ちなみにサブタイトルの

「お嬢ちゃん たわごとなんて 気にすんな」

は、Sex Pistols「Never Mind the B
ollocks」からヒントを得ました。

邦題は「勝手にしやがれ」ですが、ブリティッシュ風にリアルに訳
すと

「たわごとなんて気にするな」という意味になるそうです。

それに「お嬢ちゃん」という単語を前に持ってきて俳句調にまとめ
ました。

たわごとなんか気にしない主人公「ミューナ」の
暴走っぷりをここから感じていただければ幸いです。

最後まで読んでいた全ての皆様に感謝いたします。
ご意見、ご感想お待ちしております。

近藤美潮

あとがきにかえて（後書き）

主な登場人物の男女別人気投票受け付けております。
そのうち、雑誌にありがちなYES、NOチャート
（あなたはどのタイプっていうアレです）創りますのでよろしく。

【主な女性登場人物】

高木みうな（22歳）ギャル向けアパレル会社「DIY！」総務部
勤務のありふれたOL。彼氏いない歴〃年齢

菊池麻巳子（22歳）みうなとはお嬢様短大中等部からのマブ。某
エステ勤務。彼氏有。

榊えみり（32歳）「DIY！」総務部部长。元販売部のカリスマ
ショップ店員。性格はDS。これまた謎多し。独身。

【主な男性登場人物】

宇崎洋平（28歳）渋谷センター街奥で個人経営のランジェリーシ
ョップをたった一人で切り盛りしている野心家の男。謎多し。

浜井翔（27歳）バンドマン兼お好み焼き屋店长。宇崎とは中学生
時代バスケット部の先輩後輩として知り合う。金髪。

小沢喜代彦（年齢不明）「DIY！」代表取締役。会社の暖簾を守
りつつ、若き野心家を育てる能力を持ち合わせたやり手のビジネス
マンだが、どこか天然な憎みきれないオヤジ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1447/>

トーヨコミュニナ ~お嬢ちゃん たわごとなんて 気にすんな~

2010年10月14日12時04分発行